万象　平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和八年五月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十五巻　第二号（通巻二九〇号）

万象

BANSYO

五月号

2026. 5

平家墓所裏より訪へば落し文

千田一路

平家墓所とは平清盛の妻の弟である平時忠一族の墓所である。「平家にあらずんば人にあらず」と権勢を誇示した権大納言時忠は、壇ノ浦の戦いで源氏に敗れ、能登の国珠洲大谷に配流され文治5年2月62歳の波瀾の生涯を閉じたのである。

千田先生は、欣一・一路両先生の師弟句碑側の急な坂道を下り若葉の美しい大谷峠の谿底にある五輪塔群を裏側から訪ね、思いを馳せられたのである。また、季語「落し文」には、平安時代の「落とし手紙」の雅な意味も含まれ、作者の哀憐の情が伝わってくる。

―句集「自在」所収―

（北川禮子）

万象

BANSYO

令和八年
五月号

はなが　さいた
はなが　さいた
はひふへ　ほほほ
はなが　さいて
おこる　ひと　いない

まど・みちお

万　象

令和８年５月号

主宰作品　花びらの影……江見悦子　4
万象の窓⑤⓪　ドナルド・キーンさんと日記文学……江見悦子　5
名誉顧問作品　浮雲……小林愛子　6

風音集

……中村千久・福島せいぎ・柳澤宗正・中條睦子・松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中愛子・榎本文代・神田美穂子・井村和子・前田貴美子　7
風音散歩㊷（五月号）……小林愛子　10

同人作品

江見悦子選……11
同人作品の佳句……江見悦子選　31

同人会だより
私と俳句……中鉢弘一　32
3月の「万象」オンライン同人句会高点句
珈琲ぶれいく㉒……33
佳句佳句しかじか　同人作品鑑賞（三月号）……松原智津子　34

同人特別作品
蔵の街……上岡佳子　36
雪に暮らす……北浦詩子　37

万象ホームページ　http://www.bansyo.com

特別作品評（三月号）……荻野加壽子　38
私のこの一句……柳澤宗正・大内和憲・大村かし子　39
句集鑑賞　柳澤宗正『遠富士』……江見悦子・小林愛子・中村千久・福島せいぎ　40
北から南から　臼井宿（千葉）……中條睦子・吉中愛子・榎本文代・大久保進　横川良子　45
新同人競詠作品評……江見悦子　46
続・風のしをり㉙　子規の写生論の展開（六）　高木良多……編集部　50
万葉の抒情㉝　『万葉集』にたずねる抒情の源流㉝……橋本清　51
万象ノオト「旅」……辺野喜宝来・渡辺志ま・北口富栄・橋本紀代子・長谷川洋子・宮崎惠美　52
万象作品　江見悦子選……54
万象作品の佳句……江見悦子　64
新中央句会報（2月例会）……66
ルビーの小函（五月号）……編集部・校正担当　69
東西南北……70

〈表紙イラスト〉永井もりいち

花びらの影

江見悦子（主宰）

春の塵蘆花の書院の大机

調音の響く講堂卒業期

花韮のしろ銀輪の先に先に

平らぐる菜飯ぎつしり曲げ輪つぱ

やはらかに揺るるしだれの門桜

花の寺龍の眼に見つめられ

水底に花びらの影落ちゆけり

万象の窓㊿

ドナルド・キーンさんと日記文学

江見悦子

鬼怒鳴門（きーんどなると）、日本文学研究者・翻訳者であるドナルド・キーンさんの日本名です。東日本大震災の翌年90歳で日本国籍を取得して日本に永住し、96歳で亡くなりました。

キーンさんには、25年に亘って一人で書き上げた『日本文学の歴史』全18巻という畢生の大作があります。膨大な書物を著したエネルギーは「私は日本文学が好きで堪らない」という気持です。

キーンさんが殊に日本の「日記文学」について文学的興味を抱いたきっかけは、太平洋戦争時に語学将校として従軍し、戦死した日本人兵士たちの残された日記を翻訳したことでした。日本の軍隊では元旦に白紙の日記帳が配られたのですね。極限状況下の最後のひとときの言葉が記された、血と汗にまみれた黒い手帳から、キーンさんは初めて日本人の心を親しく知り感動した、と書いています。

第36回読売文学賞を受賞した『百代の過客　日記にみる日本人』は、平安時代から徳川時代までに書かれた日記・紀行文77編を紹介し、そこに見られる文学性を論じたもの。宮廷の女性たちの手による日記から、『奥の細道』を含めた芭蕉の5編の旅日記まで、中には無名の作者による日記も含まれています、

日本の文人の中で最も尊敬する芭蕉については多く筆を費やしています。

彼の旅のおもなる目的は、過去の歌人に霊感を与えた土地をおとなうことによって、己の芸術に新しい風を入れることであったように思われる。古い歌に詠まれた山や川の前に立つならば、必ずやその土地の霊と一緒になりそれによって己の詩を豊かにし得ると信じていたのである。

又、日記については「取り上げた日記の中で、私の関心を最も惹いたものは、日記作者その人の声にほかならなかった。（中略）表現された感情のいかんにかかわらず、単に熟達した文体ではなく、なにかはっきりと、個性的な音色のようなものを聞こうとした」とあります。

俳句の鑑賞についても全く同じことが言えると思いました。個性的な音色のようなものが聞こえて来る、そんな俳句に、今の私は惹かれています。

浮雲

小林愛子
（名誉顧問）

雁送る旧江戸川の橋あたり

雁の列崩るるコンビナートの上

浮雲のをちこち地虫穴を出づ

鳥雲に通院にある旅ごころ

囀や母の箪笥を使ひ継ぐ

老人の日向を歩く三味線草

舗装路に一つの音や落椿

風音集

凧の糸

中村千久（編集人）

大空を引く手ごたへや凧の糸
水仙の影のささやく水のおも
ものの芽のにほふ夜風のやはらかき
朧夜や橋掛かりより太郎冠者
この闇に沈みてゐるや沈丁花
はるかなる女神の島や春がすみ（宗像大社沖ノ島）

春しぐれ

福島せいぎ（顧問）

青空に触れんと山の梅ひらく
まんばうのぷかぷか浮かぶ梅岬
春しぐれ句碑となるべき石濡らす
牡丹の赤芽ほぐるる狐雨
春の雪硯の海に水を足す
山門に来てよき声の蜆売

春満月

柳澤宗正（顧問）

改札を出れば古里山笑ふ
蟻穴を出で乾びし獲物引きずれり
野仏の供花に菜の花日は西に
樹木葬の丘吹き渡る木の芽風
初桜小鳥飛び交ひ花散らす
朝ぼらけ富士の真上を春満月

春の土

中條睦子（同人会会長）

永き日や文豪カフェの木椅子席
土偶の脚太くて短うららけし
歯の抜けし子やふらここを高く漕ぎ
涅槃図を猫が一瞥してゆきぬ
霊澤の柵にくわんぬきして余寒（兼六園の泉・金城霊澤）
春の土雨近づいて来るにほひ

雛の宵　松原智津子（北海道）

薄れ日や桜花芽のまだ堅し
プラタナス幹の斑微か春浅し
段飾り済ませ久しき雛の宵
母と買ひし遠き老舗の桜餅
水子寺小さき墓に風車

紅椿　亀田やす子（栃木）

磨かれし上がり框や紅椿　益子・濱田庄司旧邸　二句
侘助や田の神祀る濱田邸
浜風やかがみて採りし春キャベツ
春夕焼水平線の紺の帯
公園にひとりの昼餉柳の芽

初蝶　沢辺たけし（千葉）

ブローチの真珠に曇り余寒なほ
遠山の麓むらさき厩出し
初蝶や真白き柵の囲ふ馬場
ピアッフェの前足春の風を踏む
ふつくらと朝日に眠る恋の猫

雛流し　吉中愛子（東京）

捨て鐘の一打あたたか上野山
一片は迷はず地まで春の雪
のつたりと波に乗る鯉春の水
流さんとおもふ雛を捧げ来し
雛流す土手草しかと掴みては

雛飾る

榎本文代（神奈川）

獺祭や床にひろげる世界地図
買うてみる閻魔稲荷寿司梅二月
包丁に刃こぼれ一つ冴返る
爆撃を映すテレビや雛飾る
木の芽晴背に土かける象の鼻

雛まつり

神田美穂子（静岡）

枝道に放置自転車猫の恋
雪解光大河は蛇行くり返し
駄菓子屋の奥の暗さや雛まつり
富士も子も翼を広げ野に遊ぶ
岳麓の真澄の空や松の芯

梅園

井村和子（石川）

梅園に久闊叙する二人かな
加賀宝生洩れくる露地を恋の猫
雛の家卒寿米寿の姉いもと
反故を燃す灰白じろと惜春忌
故郷の土の香に摘む初蕨

春の色

前田貴美子（沖縄）

立春の月がぽつんとある独り
おしゃべりな春のゴディバのチョコレート
ほほづゑに飽きて目刺を焼くことに
春風や水辺はこごむものばかり
風はもう春の色です友癒えよ

風音散歩 ㊷（五月号）

小林愛子

朧夜や橋掛かりより太郎冠者　中村千久

ぼんやりとかすむ春の夜の朧は能楽堂をも包みこむ。この狂言は能と共に一日の番組に組み込まれたもの、いま橋掛かりに登場した太郎冠者が鏡の間に向かおうとしている。

太郎冠者は狂言の代表的なキャラクター。冠者は使用人の意で、太郎冠者は言わば筆頭使用人でありながら「シテ」。喜劇は失敗を題材にしたものが多く、それを洗練された科白で聞きたいと期待する人々。笑いと朧夜の配合の妙である。

ピアッフェの前足春の風を踏む　沢辺たけし

馬場馬術の妙技にピアッフェ、パッサージュ、ピルーエットがあることを初めて知った。これらは通常の馬の動きではあり得ない足運びだそうだ。説明によるとピアッフェは「馬体を極めて収縮させて肢を高く上げた弾発のある、その場で足踏みをしているような速歩」とあり、最高難度という。「前足春の風を踏む」はまさに馬と春風の共演である。

捨て鐘の一打あたたか上野山　吉中愛子

のどかな鐘の音が一つ響く、ここは「上野山」の寛永寺。ややあって時報どおりの数の鐘の音が続き、先の一打は捨て鐘と知った。奥深い言葉に心は「暖かさ」に満たされる。「捨て鐘」は時の鐘をつき鳴らす前に注意のため定数外に鳴らす鐘のこと。江戸は三つ、京阪は一つ、現在は自由とか。

ほほづゑに飽きて目刺を焼くことに　前田貴美子

人が「ほほづゑ」をつく姿は、傍目には所在ない、又は憂愁の色を漂わせているように見えるもの。「ほほづゑに飽きて」の「飽きて」はそれを払拭する決定的な言葉、転換の妙味である。はやくも目刺を焼くことに心は奪われた。意外性は、日常で感じる一瞬の心の機微を掬い上げて生まれた。

磨かれし上がり框や紅椿　亀田やす子

益子・濱田庄司旧邸二句と前書のある一句。濱田庄司は主に昭和時代に活躍した日本の陶芸家、民芸運動の中心的な活動家の一人で、益子町に定住し益子焼の中興の祖となる。

同時作品には、邸に田の神を祀ったとあり、上がり框も年代物と思う。磨き抜かれた上がり框と紅椿が美しい。

駄菓子屋の奥の暗さや雛まつり　神田美穂子

句から昭和の匂いがする。駄菓子屋の奥は昔から暗かった。今もレトロ系駄菓子屋があり菓子の他ベーゴマ、メンコ、紙風船、ヨーヨー等の玩具も売る。子供たちが大好きな場所だ。

今日は雛まつり、駄菓子屋通いの子等もそれぞれの家の雛人形を前にささやかな祝宴を張ることであろう。

同人作品

江見悦子選

雪の葬少年ふるさと歌ひけり（句友逝く）　札幌　岡本敬子

豆を撒く鬼は居るやら居らぬやら
ブラインドの黒ずみ拭ひ春すこし
小学校休みのメール春吹雪
凍てゆるむ日没までの日のひかり　札幌　林陽子

ひたすらに積もる気配の雪一夜
冬銀河かかれる天へ急ぎけり（谷廣司さんを偲ぶ）
耳鳴りも我が身の一部春隣
馬の背のごと雪道に乗り損ね
深雪晴風紋しるき石狩野　札幌　落合裕子

一車線占領したり雪の壁
市電の子両手に氷柱握りしめ
板葺きの低き軒先大氷柱
静かさや残月冴ゆる藻岩山
北国にやつと四温の空の色　札幌　濵谷和代

寒月や家鳴りやまぬ山の宿

北屋根をずり落つる雪音確か
木蓮の冬芽膨らむ日のひかり
虫喰ひの穴を繕ふ日向ぼこ
海氷に一縷の水脈や観光船

札幌　大内和憲

ころぶまい滑るまいぞと厄詣
大氷柱四囲にめぐらすコタンかな
雪こぐや宇宙遊泳さながらに
護摩火煽る五体投地や寒波急
細氷の空へ目ざめの窓をあけ

札幌　紅露恵子

黒雲を閃光ひとすぢ冬の雷
大寒や丹田の傷さする朝
冬帝に囚はれ身動きままならず
離れざる枯葉の揺るるポプラの秀
寒明のけふ青空のやはらかし

札幌　大内マキ子

春の海沖一枚の大鏡
牛の瞳にうつりて丸し雪解山
雪しづく牧舎の匂風にのり
春夕焼雑木の山の膨れたり
雪解雫かなづる朝の靴選び

札幌　中鉢弘一

新雪の絹のひらめき鷺の発つ
残照や流氷朱にも碧にも
雪雲に消えゆく機体音もなく
掌の風花消ゆる早さかな
木の芽張る千手のやうな枝先に

札幌　北浦詩子

大振りの寒鰈手に漁師来る
ヨガマットの巻きぐせ硬き寒さかな
蝦夷狸夜な夜な糞の置き土産
選挙カーの名前かき消す雪煙
満面の笑顔の遺影鳥雲に

江別　佐藤哲

焼き黍のワゴンにかかる春の雪
そぞろ寒蝦夷富士のかげ大地抱く
子ら全員空に見送る冬の雁
栗鼠駆くる音乾きけり雪解山
冴返る石狩湾に日矢の束

江別　太田佳美

凍て坂の一歩に迷ひ遠回り
遅れ来し電車の鼻につらかな
轟音や尺余の雪の滑り落ち
街灯に照る凍道の鏡なす
贈られし君子蘭日のやはらかし

新潟　髙橋ひろ

淡雪の地に落ちてすぐ地の色に
置石の浅きくぼみの薄氷
薄氷を踏む硝子ほど恐れずに
もう一度雛壇を見て灯消す
蜆汁音ある間火を離れ

新潟　髙野松風

切り貼りの大活字本寒に入る
春光のしろがね色の梢かな
公園の外灯ともり雪催
冬の田の鳶は村へ風に乗り
整然と白鳥よぎる五頭山の裾

益子　光岡れい子

梅三分俳句のたまご身の内に
朝日燦庭のをちこち囀れり
光抱く蕾ほどくる辛夷かな
空真青囁き出せる冬木の芽
背を伸ばし一歩踏み出す寒の晴

芳賀　大村かし子

鮭の頭の並ぶ店頭春めきぬ
仏壇に立春の水かがやかせ
電線に群がる雀春めける
春の光あり撫牛の全身に
初午の一日がかりしもつかれ

※しもつかれ……北関東地方の郷土料理

宇都宮　阿久津勝利

むささびの飛ぶ千年の寺領かな
堀割に野菜を洗ふ雨水かな
春めくや仮設の窓の雑木山
白鳥の黒ずみはじむ夕間暮
八甲田山へ続く路傍のふきのたう

栃木　上岡佳子

春めくやセスナ飛び立つ河川敷
玻璃戸越し巣藁雀を見て飽かぬ
涅槃図のどこにも猫の見当たらず

ゆるやかに舞ふや鴛の羽模様
追儺豆除けて隣へ回覧板

佐野　増田幸子

万葉の沢に小粒の蜆かな
ローソンまで百七十歩寒明くる
咲きつくす蠟梅の黄の香りかな
門入るや黄紅白の香る梅
日を背に草萌の庭二巡り

佐野　加藤季代

鯉きらりゆらり八嶋に春立てり
如月の万華鏡めく川面かな
御空より白鳥の声降り来る
ハーブ園もこもこ春の土匂ふ
剪定や鋏鋼の音放つ

佐野　阿部澄

猿廻しととんととんと客を呼ぶ
抱き寄せて猿を宥むる猿廻し
探梅や風の吹き止む出城跡
校庭に紐の短き凧揃ふ
葛湯ふく投句の目鼻つきし夜

佐野　芝宮留美子

玻璃ごしの冬日溢るる礼拝堂
初電車都へ少し装ひて
拍子木にざわめきの引く初芝居
さらさらの春雪を風舞ひ上ぐる
教会にはや色づきて花ミモザ

佐野　島田和枝

アロエ咲く凪ぎたる海の見ゆる丘
寒の月メタセコイアを尖らせて
春炬燵頓珍漢の老二人
浅春の沼面に鷺の影一つ
春の味手探りしつつしもつかれ

佐野　売野緑

鱈ちりの締めの雑炊老夫婦
八日目の切干の香を仕舞ひけり
炊きたての赤飯届く初不動
駆け上がる猫の爪跡白障子
せせらぎの日の斑に踊る蜆かな

佐野　店網洋子

いつせいに庭木に止まる寒雀

空青し沼半分の氷面鏡
春の空だんだん小さく熱気球
外灯の色につつまれ春の雪
ぽつぽつぽ石油ストーブ消ゆるとき

足利　大木茂

紅梅や地蔵菩薩の座を遷す
探梅行尾根へ短き九十九折
思春期の子らは小声に鬼やらひ
春めくや勝守売る巫女二人
一代で終はる床屋やヒヤシンス

土浦　澤照枝

葺替や小町ゆかりの札所寺
常総の土ふかふかと春菜生ふ
節生家無人となりて春障子
※節……長塚節（歌人・小説家）
木洩れ日の影早春の長屋門
梅一枝賜り屋敷林巡る

加須　茂木弘子

賽銭をそつと滑らせ初詣
柝の音に姿勢を正す初芝居
水仙の香る夕風久女の忌
初句会締めの熱唱カンツォーネ
吹き下ろす赤城山へ鴨の声荒し

さいたま　山本右近

鶏冠の長き雄叫び春を告ぐ
紅椿落ちて日陰の濃くなりぬ
蓋開けて春の彩り曲げわつぱ
逃水を追うてよはひを重ね来し
尾の長き鳥影よぎる春障子

所沢　三好かほる

待春の時の鐘鳴る城下町
初氷ゆづり葉一枚閉ぢこめて
白菜の芯の甘さよ寒明くる
立春のあかときの空二藍に
花祭張子の象も加はりて

所沢　南雲秀子

春めくや本殿の空真青なる
春の雪積む渓谷に五平餅
米買うて水仙の花二三束
税務署へ続く車列や春北風
菜の花の畑曲がり来る乳母車

千葉　田中道江

地の底に春待つものの気配かな
釣人の長き桟橋風光る
うららかや富士山を拝せる波しづか
春日の潮目くつきり椰子の花
巡り来て椿の森の藪椿

千葉　松浦陵保

漆黒の能登の瓦に春日射す
竹林の狭間に直射冬日濃し
冬大根育ちしままに残さるる
ひこばえの漲る力逞しき
食欲の旺盛となる春の鯉

千葉　喜多恭仁子

二十年手の皺刻み味噌仕込む
期日前投票終へて「鬼は外」
春立つや向かう三軒槌の音
癌転移の疑ひ晴れて牡蠣フライ
編み残しの母のセーター仕上げたり

千葉　大月玲子

春立つやゆつくり伸ばすふくらはぎ
ひとつづつ息吐くやうに梅開く
ふきのたう妻喜ばす為に摘む
オカリナのまろき音色や春を呼ぶ
つくばひの底にうすらひ陽の欠片

佐倉　大内佐奈枝

久闊を叙すてふ先づは熱燗で
面とれば追儺の鬼は顔見知り
一円玉背に貼りつけて亀鳴けり
蕗のたう庭に小さき日向あり
我に買ふ一粒バレンタインの日

佐倉　三屋英俊

荒垢離や南無妙の声闇に凍て
待春の掌に土筆絵の織部焼
寒明の僧満願の達磨髭
春寒し裏木戸軋む武家屋敷
うららかな日や水のきら風のきら
長閑けしや碗に薄茶の青き海

佐倉　横川良子

撓ふだけ撓ひて雪を払ふ枝
ひこばえや沼一望の古戦場

いまさらの『北越雪譜』寒明くる
回転ドア両の手で押す余寒かな
春泥をこそげて旅を仕舞ひけり

四街道　奥　太雅

補助輪を外す自転車日脚伸ぶ
琴復習ふ庭の明るし小正月
橋脚の見ゆる湖底や冬旱
朝練の球児の声や鼓草
受験子の犬を小脇にVサイン

四街道　塗木　翠雲

瑕の無き冬青空や阪神忌
ひよいと来てあち見こち見や冬の鳥
寒明くる早一年の良太の忌
雪下ろす屋根に梯子を括り付け
雪沓の足取り重き投票所

船橋　山下　良江

拝殿の手摺紅白節分会
新年の神殿囲む人の列
鯛焼の屋台賑はふ初詣
日のそそぐ庭満開の梅の花
足許へひそと散り敷く桃の花

船橋　久保村　淑子

竹林の軋む響きや冴返る
雪時雨ホームを歩く鳩の足
仏間より般若心経朧の夜
薄雪の校門くぐる投票日
立ち話で終はる女子会春日和

船橋　片桐　帆一

房総の山並遥か年惜しむ
背を伸ばし声発すれば寒日和
風二月日差し賜る雀達
二ン月の日差しに湾の波打てり
豆撒の声小さくして福は内

船橋　宮本　加津代

老ひとり小声で豆を福は内
水仙の姿崩さず花終はる
頬杖はやがて手枕春の昼
春昼や時計を出づる小人たち
手術後の視界明るく春立てり

船橋　中嶋久登

冬銀河水平線の上流る
掌に七十引いて年の豆
南極への船に横付け春立ちぬ
コンテナも春陽も重ね貨物船
春隣鷗びつしり舫ひ網

柏　山本とく江

節分けの無傷の空へ宮の千木
逃げ惑ふ鬼は氏子よ鬼やらひ
故里は廃屋ばかり経よみ鳥
煙りたる山の息吹や呼子鳥
黄泉路へと夫を誘ふ涅槃西風

柏　内田郁代

大寒の底顕なるあばれ川
豆撒の枡は叙勲の記念品
畑のものみな立ち上がる春の雨
常磐木の枝を縫ひたり春の鳥
風光る家並の近きローカル線

柏　古川京子

野の枯れて遠くのものの近づきぬ
煮大根湯気をくづさぬ箸使ひ
梅探る川風背にようしやなく
粉と舞ひ綿と降りたり春の雪
東海林太郎像の眼鏡や春の雪

流山　穂苅照子

靡かざる力ありけり蓮の骨
切れ切れに水琴窟の音凍つる
白鳥の磨きあげたる水鏡
日を吸ひ込んで蠟梅は月の色
神木に緩む注連縄山笑ふ

市川　奥澤よし江

同窓の媼二人に春満月
朝東風や砂のやはらぐ九十九里
踏み入りてそつと手にする蕗のたう
若草にハンカチ広げひと息す
一献は野蒜と味噌でそれでよし

東京　名和政代

まだ暗きラジオ体操梅真白
角帯の茶人小太り糸桜
車座の小学生に春の風

節分のモビールの鬼赤青黄
毘沙門天鶯餅のできる頃

東京　藤田裕子

石灯籠残る更地に雪の花
遠富士の常より近く寒夕焼
ストーブの薬缶しゅんしゅん夜の更くる
脈を診る指ほの紅く春立ちぬ
巻紙を解くや墨の香春灯

東京　加賀葉子

姫沙羅の芽吹やさしき白さかな
走り根の色を増したり春時雨
笹擦れの音寄せ返す春の風
ホバリングの蜂の光りてふいに消ゆ
紅白梅まじりて散るや苔の上

東京　久留島規子

霜の夜は終ひまで読むミステリー
大寒の日の出は渋谷あたりから
春隣二度寝の夫の大鼾
憂きことの解けて晴れ晴れ春立てり
春浅しポテトサラダに茹で卵

東京　岡村純子

寒明や川面の光さんざめく
春浅し辻に思はぬ人と遇ひ
職人の足場の高き春日和
たわわなる空き家の蜜柑枝低く
立春の闇の深きに父の声

東京　桑原優美子

配らるる紙音迫り受験生
冠を結び直して雛納
駅前の路上演奏春隣
うららかや雀つぎつぎ地に降りて
傾眠の母に届かぬ春の風

東京　三村紀子

宝冠の珊瑚揺るるや古雛
雛の間へ渡り廊下をきしませて
春めくやメトロに増ゆる乳母車
空色の花苗並ぶ春の土
犬逝きて牛乳瓶に水仙花

東京　小池清晴

蝶結びほどけて落ちし初神籤

日溜りに水鳥芝を啄めり
梅林の仄かに赤き夕間暮
手賀沼を滑る白帆や日脚伸ぶ
仏の座畑の周りに早々と

東京　一由久美子

白樫を這ふ枯蔦の硬さかな
羽ばたけるものの影ゆく春障子
淡雪や剝いてつややか黒たまご
あたたかや吊革低き電車来る
どんぐりを拾へば芽立ちらしきもの

武蔵野　砂地宏子

寒中の風の運べる別れかな（悼 下嶽孝一さん）
路地裏の寒満月を仰ぎけり
薩摩より来り二月のはじけ豆
仏壇の供花に今年もフリージア
無骨なる若き父の手桃の花
このあたり下宿屋なりき草萌ゆる

武蔵村山　松井宣夫

猫柳白き穂先を青空へ
勢揃ひ正月場所の芸者衆
手習ひの手提げ袋に猫柳
手拭を貰ひて帰る初芝居
歌詠みの名人春の宙を逝く

町田　広瀬俊雄

阿夫利嶺の襞くつきりと春の雪
青空をすつくと押し上ぐ雪の富士
唐梅の匂ひも雪に埋もれたる
茅葺の屋根を燻せる囲炉裏かな
薬医門の軒につらなる氷柱かな

町田　桔梗純

寒晴や上野の森の大鴉
早梅の鉢水引の鴨と亀
供花へ足す水仙の香や喪の知らせ
ビルの間のおぼろの富士や入り日燃ゆ
明けぬれば全てを包む春の雪

日野　喜多尾明子

ちやんばらのつららきらきら登校児
眠い子の背を掻きやる春隣
早梅や見知らぬ道へ誘はれ
歩かばやあたたかなれば川を見に

片付かぬものがここそこ二月逝く

横浜　西本才子

漁港より提げ来し鰆塩打てり
先駆けて水草生ふる山の池
夕暮の相模の空を帰る鴨
馬場巡る馬の嘶き春来る
岸離るる時声高きかいつぶり

横浜　三木豊子

朝の粥夕べ届きし寒卵
鈴生りの金柑残し引越しぬ
丸窓の竹の葉揺るる春障子
握る手をハグして返し卒業す
神殿に巫女の連れ舞追儺式

横浜　星野信子

ぴしぴしと凍る結露や明けの窓
自販機のおしるこことり春近し
置炬燵転た寝の子の泣き黒子
懐かしき人と出会ふや雪の駅
黒塗りの町家の板戸春浅し

川崎　新妻奎子

あはあはと溶けさうな空春立てり
紅梅の枝垂るる坂や試歩の道
帰るさに野焼の匂つけしまま
枕ぽんと叩きなほして朝寝かな
湯通しの花菜の零すうすみどり

川崎　大久保進

氷海の夜空を駆くるワルキューレ
背合はせの駅のベンチや日脚伸ぶ
二歩三歩四温にゆるむ膝頭
春寒の風まだ荒き野面積み
連山に顔出す富士や山笑ふ
過去問の付箋の数や二月尽

鎌倉　恒川清爾

噴煙のとぎれとぎれや山眠る
焼け落ちてどんどの達磨目を剝けり
春浅し白寿の友の訃報受く
春寒や紅茶に少し赤ワイン
辛夷咲く固く閉ざしし勅使門

伊勢原　佐藤和子

白息をぎゆうぎゆう詰めに山手線
たたみ来る波の大小春立てり
遠富士に渦巻く雲や春一番
榛の花絶えずどこかで水の音
春の雲湧いては溶けて海の上

静岡　大村峰子

朴散りて空の高さの戻りけり
囀に囲まれてをり分教場
冬の鵙枝移りては尾を振れり
小綬鶏に呼ばれて入るや茶の畝へ
冬木の芽一つ一つに雨の粒

静岡　宮﨑知恵美

初日浴ぶ湖に一筋魚の影
受話機より自動音声初電話
一村を冬満月の照らしたり
初鴉来て一声を落としたり
初夢の姉の誘ひを断はりぬ

静岡　望月敏男

片付かぬ書斎も良しと去年今年
初夢や今此処我を詠めと言ふ
数へ日やテンポの迅き駅ピアノ
寒禽の尖り声滲むダム湖かな
蒙古斑撫で元日のむつき替ふ

静岡　藤原千代子

壇上に笑む師の遺影初句会
百年の楠の枝振り初参
大手門搦手門に梅匂ふ
満員の旅の講座や梅真白
朝日差す窓辺に猫とヒヤシンス

静岡　荻野加壽子

顳顬（こめかみ）をひびかせセロリひとりの餉
せせらぎの音のためらひ冬桜
春近し蕎麦に割りたる箸匂ふ
春灯やボタン四ツ穴二ツ穴
立春や大地もぞもぞして来る
蹲の水を踊らせ春の鳥

静岡　小川明美

仕舞湯の我を待ちたる柚子二つ
都鳥胸膨らませ眠りをり

千本鳥居潜るやふくら雀どち
神木の木洩れ日浴ぶる寒鴉
探梅や東照宮へ続く道

静岡　藤本節子

初田打登呂の赤米供へけり
空つ風ビルの谷間のパーキング
寒晴や鍑絵のやうな今朝の富士
大根の豊かなる葉を持て余す
霜柱傘寿の一歩踏み締むる

静岡　大長文昭

泥の手に泥をしごけり蓮掘女
畦ぐろに仕事始の鍬と鎌
アトリエの高き背もたれ春遅遅と
春一番河口に寄する藻塩草
風荒るる野梅の紅を浴びにけり

静岡　加山ひさ子

山裾に僅かな夕日掛大根
まなぶたの重くなりたり春まぢか
立春の空の高さや鳶の笛
声掛くる墓石に春の日差しかな
雨だれの落つる早さや春兆す

静岡　石川裕子

里神楽こんこんちきと笛太鼓
反故一枚広げ幼と蜜柑むく
空の枡掲げ豆撒終はりけり
読み止しに菩薩の栞春の月
乳母車に園児六人花菜風

静岡　本多ひとみ

一声を沼面に残し春の鴨
もう一度続きを見たき春の夢
東風吹くや松原越しに波の音
春塵の薄く積もれり神籤箱
松が枝を零るる日差し春兆す

静岡　杉澤修

風の声鳥の声聴き梅探る
紅一枝空へさしのべ梅日和
笹鳴や海光とどく磴千段
山葵田を見下ろす雨量観測所
落人の村を貫く雪解水

静岡　松永博子

クッキーもキャンディも舞ふ鬼やらひ
梅東風や校旗と市旗と日章旗
水温む池にぷわつと泡ひとつ
春めくや練切舌にまつたりと
海舟の筆や建国記念の日

射水　成瀬真紀子

一人居のくらしに慣れず雪霏霏と
みそ汁の花麩ふつくら春を待つ
下萌や葉先は黒く地に伏して
金縷梅やうす日に返す黄金いろ
雨粒に蕾大きく梅二月

金沢　今越みち子

銃声に鴨翔つ羽音水しぶき
探鳥のあとあつあつの鰤大根
料亭の厨へ届く鴨の箱
開かぬ戸にますます怒る雪女郎
赤鬼の顔の練菓子節分会

金沢　伊藤美音子

山眠る空群青に鳶の笛
寒禽の鋭声にあくる耶蘇の谷
針箱に糸もつれたる一葉忌
捨て切れぬ本一抱へ年つまる
新発意の声朗朗と初勤行

※発意……得度したばかりの若い僧侶

金沢　高田たみ子

着ぶくれてバスに乗る人降るる人
連山の空の明るき寒の明け
声あげて早口ことば春炬燵
デイケアへ送り出す朝春の鳥
節分の鬼の面つけ幼かな

金沢　豊田高子

頻埋め母ちんまりと春ショール
諸子釣る夕日まみれの親子かな
春寒やこゑ裏返る木偶の姫
入潮の藻屑のからむ白魚網
木の芽晴スプーン進む離乳食

金沢　松井佐枝子

おとがひを上げて見上ぐる冬銀河
朝日映ゆ山田にあはき雪解靄
烏賊焙り振舞ひ酒や夕焚火

小流れの糸魚きらやか木の芽風
古雛お道具寸のお針箱

金沢　石川純子

軒氷柱夜の静寂に太らせて
ほつこりと雪に抱かるる純子句碑
寒晴や連なる遠嶺光り合ふ
野面積みの垣に降りたる忘れ雪
冬の鳥光散らして枝移る

金沢　河野尚子

加賀の奥湯宿に囲む牡丹鍋
一瞬に火の駆けのぼるどんど焼
暗闇の空に罅入る鰤起し
風紋に光る貝殻寒の晴
朝市や手に滑らせて選る海鼠

金沢　道場啓子

枕元のラジオ霜夜の丑三つ時
煮返しの鍋焦げつかす三日かな
役者めく枝ぶり凍つる半纏木
春浅し芥もろとも呑む真鯉
貼り紙の女形の眼雪舞へり

金沢　杉本年虹

こぶこぶの雪道踏まへポストまで
寝ねがてに過ぎし思ひ出雪しづる
あをあをと葉を閉ぢ込めて霜くづれ
白加賀のふふめる日和初句会
女正月乳鋲艶めく石川門

金沢　南恵子

つかの間の空の青さや寒四郎
大寒の背中に触るる聴診器
亀石のまぶた重さうつくしんぼ
寄居虫の窮屈さうに動き出す
蕉翁の像の裾なる蝌蚪の国

金沢　松下信子

深雪晴窓辺を鳥の影また影
置炬燵悪戯つ児は豆画伯
雪しんしんテレビ点きたるままの部屋
長靴の三三五五や雪明り
春昼の二人紅茶派珈琲派

金沢　北川禮子

鬼は外綾子の句碑へ声響く

水仙花石一つなる水夫の墓
寒夕焼霊峰望む一里塚
輪島塗守ると塗師の初電話
托鉢の太鼓打ちゆく雪の路地

金沢　清水英理子

今日もまた修業のごとく雪を掻く
春立つや真白き物を身に一つ
蠟梅の匂ひ纏へりカメラマン
玉砂利の清しき音や梅二月
さくら餅同じ話の叔母を訪ふ

金沢　松田好子

雪の花空一点に兆す青
立春や手首に仄とコロンの香
雪解水逆さ写しの城と空
袖裾をかばうて芸子福は内
言ひちがひ聞きちがひしつ青き踏む

金沢　井端久子

凍蝶の菜よりこぼるる夜の厨
外は雪ミルクココアの噴きこぼれ
立春の床屋に昨夜の豆袋
豆乳の湯気の仄かに節替り
夕鐘のおぼろに渉る城下町
杜の木々雪解雫の音を奏で

七尾　谷渡末枝

後戻りして二つ三つふきのたう
冴返るきつねうどんに舌焦がし
古漬に白湯かけて食む余寒かな
ほがらかに終日雪解雫かな
まぎれなき空に帰雁の道しるべ

白山　加藤美栄子

石垣の反りの鋭し寒に入る
凍星を見上げ見得切る木偶人形
九十の年豆かぞへ巾着に
寒鴉鳴く更地の厨辺りかな
寒の水放ち豆腐の角尖る

敦賀　倉谷ます美

雪しまく窓に我が街失せにけり
うす日背に神の鯉呼ぶ初昔
草稿の目を休ませて福寿草
子等退きて居間に独り居七日粥

しづまりし枯野の原は陶の里

敦賀　鶴田勝子

雪しまき湯畑の湯気かき乱れ
七日粥里の息吹のうすみどり
天地をまつさかさまに梯子乗
寄合のあとは親しむおでん酒
信濃路の星降る夜や枝凍る

敦賀　中川雅月

大所帯湯気大振りの七日粥
鳶隊の法被ひらりと出初式
初恋の手紙の名残冬ざくら
雪折の気比の松原波の音
初場所や異国の力士応援し

敦賀　中村優

「ただいま」におでんの匂ひ応へけり
友逝きて届く手紙や垂り雪
堅雪に埋もれしままや親不知
蠟梅の花の数だけ雀かな
足場組む防風ネット凍返る

敦賀　為永香月枝

七色の水を放つや出初式
退屈てふ幸を授かり毛糸編む
雪しまき濁声もるる魚市場
海しけて風に傾く野水仙
母宛の父の墨書や榾明り

徳島　福島吉美

買初は木目のそろふ箸と匙
手を握るだけの見舞や春立つ日
とぎ汁を庭木に注ぐ冬旱
おでん煮る使ひ古しの落し蓋
回廊にモンロー笑ふ梅の寺

徳島　村上和義

新聞に包みて呉るる蕗の薹
俘虜暮らす名残の里に梅探る
白梅の匂ふ寺門に屠腹の碑
春泥に戦車の轍今もなほ
歳時記を繰るも難儀や春の風邪

徳島　宮西修一

大寒の竹が打ち合ふ音すなり

七日粥吹いて一日始まれり
煮凝のてらてら揺れて朝の卓
十円玉拾ひ上ぐる手悴めり
楠の洞に冬草青々と

徳島　平岡　功

初夢や青き地球を宇宙より
大海へ水脈引く小舟初景色
戸を繰れば礫となりぬ初雀
海光と潮の匂ひや野水仙
砲台跡水仙の香に包まれて

石井　木内　マヤ

赤犬の赤毛の色の冬枯野
寒の水五臓六腑の清められ
梅の寺仏陀のことば書き写す
寝込む子のうどんに落とす寒卵
少年は翼を隠し青き踏む

小松島　岡田　あゆみ

風花のひとさし舞うてゆきにけり
風花や腹ぶつけ合ふ舫ひ船
抉られて凍る土塊獣道
喝采のごとく飛び立つ鴨の陣
初電話恐竜の名をすらすらと

松山　入河　大河

三口目の香り新たに薺粥
ほんのりと赤らむ頬の初湯かな
じんわりと白濁残る雑煮椀
わらわらと根方をつつく冬雀
一雨のふうはり注ぐ雨水なる

福岡　宮田　千恵子

寒の水五粒のくすり一気のみ
水といふ水の光れる寒の明け
無住寺の庭に日当たる落椿
転ぶなと言ひしが転ぶ霜の朝
早春の握手の手と手ふくらめる
ずれてゐる背骨こつんと冬銀河

長崎　丸本　祥夫

松葉蟹みそを刮げて甲羅酒
出来不出来叩きて計る備長炭
寒行の朱き肌より湯気もうもう
酒を焚く竹筒挿せり札納

下足札叩きて案内冬座敷　西海　山下敦子

椋の木の小枝の先の春の月
ねぎ坊主土の黒さの際立てり
待つと言ふ胸のときめき春隣
空の底ミルクのやうな春の朝
落椿踏まず海まで歩きけり　宮崎　中山宣

野蒜摘む野畑の土手の青あをと
水仙花（小戸の阿波岐原）神々集ふ降臨地
胴吹き芽ぐんぐん伸ぶる日和かな
剪定の鋏の音の響きたり
高みより鵟の瞠る棚田かな　宮崎　中山芳教

浅春の神代の語りみそぎ池
湧水の泡が泡うむ春の池
白幣を映すさざ波風光る
紅梅の八重をかさねて炎めく
家持の歌碑を彩る紅白梅　宮崎　鳥居達史

窯出しの壺ぱちぱちと木の芽冷
寂れゆく村草餅の色の濃し
自在鉤の深き亀裂や冴返る
白魚を礼を正して啜りけり
爆弾処理済みし河原や揚雲雀　那覇　中本清

春節や無限の闇を脱ぐ久高島
国境の島に日の丸年迎ふ
獅子頭脱ぎし漢の大背伸び
春暁の銅鑼に韻あり御開門
海蛇の初潮上るあしたかな　那覇　辺野喜宝来

初旅や干支の土鈴を耳に振る
母訪うて夕餉は母の鮭雑炊
杖の母日向ぼこりのベンチまで
違へたる道に出合へり寒桜
水の匂ひ風の匂ひや春隣　西原　宮城勉

地をつつく鳩に事問ふ日向ぼこ

走り根の階の窪冬すみれ
木の末のうるむ朝空冬の果
海光を影曳くフェリー冴返る
珊瑚浜寄せては返す春の音

豊見城　渡真利真澄

初染に福木の黄色煮出しけり
早春の縁に黒糖もてなさる
春の宵奇譚伝ふる屋敷跡
春風や無人の棚に卵売る
水温む石橋映り人映り

ベルリン　鈴木波江

結氷に頭を埋め大き鳥逝けり
物乞の乗り来て歌ふ余寒かな
大橋を囲む四棟春の星
かがみ採る指先ほどの蕗の薹
春の昼ひたに俯きうなじ剃る

同人作品の佳句

江見悦子選

冬銀河（谷廣司さんを偲ぶ）かかれる天へ急ぎけり　林　陽子
寒の月メタセコイアを尖らせて　島田和枝
荒垢離や南無妙の声闇に凍て　三屋英俊
靡かざる力ありけり蓮の骨　穂苅照子
どんぐりを拾へば芽立ちらしきもの　一由久美子
無骨なる若き父の手桃の花　砂地宏子
春寒の風まだ荒き野面積み　大久保　進
榛の花絶えずどこかで水の音　佐藤和子
蹲の水を躍らせ春の鳥　荻野加壽子
泥の手に泥をしごけり蓮掘女　大長文昭
雪しんしんテレビ点きたるままの部屋　松下信子
夕鐘のおぼろに渉る城下町　井端久子
抉られて凍る土塊獣道　岡田あゆみ
早春の握手の手と手ふくらめる　宮田千恵子
初染に福木の黄色煮出しけり　渡真利真澄

同人会だより

私と俳句

中鉢弘一

私と俳句との出会いは、20余年前の石狩川沿線での自然観察会への参加に遡る。その会場で、当時北句会のメンバーだったM氏から俳句を勧められ、見学だけでもと思い参加したが、指導者はじめ会員の人柄に魅かれ、いつしか万象北句会の会員となっていた。

「万象」でのかけがえのない出会いは、故飛高隆夫先生である。先生は、かけ出しの会員に困惑しながら、時には電話で句の趣意の確認など、丁重な指導をして下さった。先生による同人推挙は、おそらく私が最後であったように思う。

北句会についてであるが、特徴的な活動として年に数回の吟行と共に、春秋二回ほどのグループ短冊展が挙げられる。特に短冊展は、短冊を貼る掛軸も皆で板を切っての共同作業によるものであった。展示期間中には句会の紹介と参加呼びかけのチラシ配布を行い、見学者の中から入会希望者があるのも嬉しい収穫であった。

会員個々への講師の細やかな指導もあり、常時10名ほどの会員が和気藹々と俳句を楽しんでいる。会員の高齢化と共に、新加入者とのギャップも課題ではあるが、年の差による視点の違いもまた、大いに意義がある。

自然に対する畏敬の念と観察力の必要性を念頭に置きながら、雄大な景色を満喫しつつ、句づくりを楽しんでゆきたいと思う。

3月の「万象」オンライン同人句会高点句

8 改札を出ればふるさと山笑ふ　柳澤　宗正（横浜）
8 大空を引く手ごたへや凧の糸　中村　千久（志木）
6 草萌の浮力足裏にかすかなる　古川　京子（柏）
6 幼子は指ごと口へひなあられ　加賀　葉子（東京）
5 外電に飛び交ふ戦禍鳥雲に　大久保　進（川崎）
5 啓蟄やほどけぬ紐をほどきゐて　桑原優美子（東京）
5 電池切れのやうに子猫の寝落ちたり　成瀬真紀子（射水）
4 鷹鳩となりおてんばは花嫁に　三屋　英俊（佐倉）
4 春寒や血管透くる猫の耳　穂苅　照子（流山）
4 ひと枝のことに揺れゐる初音かな　山本　右近（さいたま）
4 恐竜の骨を眠らせ山笑ふ　村上　和義（徳島）
4 故郷の泥を吐き出す蜆かな　穂苅　照子（流山）
3 春塵の指跡幽か駅ピアノ　山本　右近（さいたま）
3 梅東風や百花のリレーはじまりぬ　古川　京子（柏）
3 富士も子も翼を広げ野に遊ぶ　神田美穂子（静岡）
3 磔刑のステンドグラス麦青む　恒川　清爾（鎌倉）
3 ピアッフェの前足春の風を踏む　沢辺たけし（千葉）
3 雛納歳月ともに納めけり　紅露　恵子（札幌）
3 フラミンゴの羽根を持ち去る巣組み鳥　成瀬真紀子（射水）
3 涅槃西風夫安らかに安らかに　山本とく江（柏）
3 きさらぎのせせらぎ奔るころころと　喜多尾明子（日野）
3 雁帰る海を呑み込む空の色　小林　愛子（横浜）
3 水車よりほとばしりたるつばくらめ　丸本　祥夫（長崎）
3 花ミモザ日照雨に光る黄のしずく　大久保　進（川崎）

（＊句頭の数字は点数を示しています）

珈琲ぷれいく72

今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に厂（ガンダレ）の漢字を入れましょう。

1 蘆花旧居□しろたへに春火桶　飯田蛇笏
2 □や残るものみな美しき　石田波郷
3 夕焼や若し夫在らば□妻　鈴木真砂女
4 古九谷の深むらさきも□の頃　細見綾子
5 息白し長屋の空に変□器　沢木欣一
6 みちのくは牛ばかりなり□出し　瀧澤伊代次
7 米□より北に用あり夏帽子　内海良太
8 咲き満ちてさて□介や白木蓮　飛高隆夫
9 銀のときはた金のとき芒□　鷹羽狩行
10 手がありて鉄棒つかむ□爆忌　奥坂まや
11 蚊を打つて我鬼忌の□ひびきけり　飴山實
12 ことごとく□となりけり桜榾　長谷川櫂

【正解】
1 灰　2 雁（かりがね）　3 厨　4 雁
5 圧　6 厩　7 原　8 厄
9 原　10 原　11 厠　12 灰

おいしい俳句

第15回　嵐山光三郎

熱燗を置くや指先耳に当て　吉屋信子

吉屋信子は新潟市生まれ、少女小説をはじめ女性むけ啓蒙小説を書き、「女の吉川英治」といわれた。大正から昭和にかけて、女性読者を対象にした文学の市民権を得た。生涯独身で過ごしたことでも知られる。俳句は昭和十九年、鎌倉へ疎開したとき、星野立子と知りあってはじめた。戦後は虚子庵での句会・文春句会、銀座百店句会などに出かけた。

小説家が俳句を詠むのは、人と会っているときに一瞬の観察をするために役に立つ。旅先や宴会や散歩中でも、俳句的一瞬を五七五カメラで撮影しておく。

熱燗の句は、宴会で日本酒を飲んだときの記憶。熱い徳利をつかんで盃につごうとすると、あちちちち、となって思わず耳たぶをつかんだ。耳たぶは人体で一番冷たいところですが、いまはそんなことをする人は少なくなった。自分の小説が映画化されて、試写室で観たときには「香水や囲の試写室誰やらん」。試写室は小さな場所で客席は三十席ぐらい。女の香水が匂ってきて「あれ、だれの香水かしら」と勘ぐっている。匂いに敏感なところも作家的本能です。出演した女優がつけていた高級香水でしょうか。「おでんやがよくでるテレビドラマかな」は、いまもムカシも同じです。

公社団法人 俳人協会

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞（三月号）

松原智津子

吹かれゐる合歓の枯実の軽さかな　落合裕子

北海道の公園や街路樹、家々の庭に合歓の花を見かけることはほとんど無い。作者は恐らく数少ない一本を見付けて、風に吹かれている枯実の軽さを発見した。

〈虹飛んで来たるかといふ合歓の花〉は細見綾子の句であるが、合歓の花を見ると、夢とか虹とかを思い浮かべるという発想は詩心。掲句は、正しく写実の一句と思われる。

古暦良きも悪しきも過ぎしこと　北浦詩子

年が明けて去年の暦は御用済みとなるが、沢山書き込まれたメモは思い出深い。良い事は幸せな気持を振り返ると処分が躊躇され、失敗やうまくいかなかった書込みも反省の材料。作者はそれらを過ぎたこととして、新しい年に向かおうとしている。日記とは異なり短いメモだが懐かしい。

近づけば離るる鴨の間合かな　髙野松風

渡り鳥の中でも、鴨は街中の池でもよく見かけ、留鳥も多く、野鳥としては親しい存在である。

この句、仲間同士の動きを観察したというよりは、即かず離れずの雌雄の間合を眼目とした眼前の景と思われる。

繁殖期ではなく、すでに雌雄一対となった後の余裕を思わせる一句と鑑賞するのは独断であろうか。

秋に北から飛来し春に北に帰る鴨のひとときの情景。

音たのし大股小股に落葉道　上岡佳子

散歩コースの大小様々な木々の落葉道。ルンルン気分であっちこっち踏み分けて行く作者。落葉の大きさや種類で、踏むときの音の違いを発見。今日は楽しい散歩でした。

綿虫の賑はひ影も声もなく　茂木弘子

綿虫はその土地土地に呼称があるようだが、いずれも雪、そして冬が近いことを知らせる存在。空中に漂っているのを見た日は寒さを想像するが、儚さもあって嫌いではない。

綿虫が沢山湧き出た日、「影も声も無く」と発想が閃いた。当たり前のことながら、しみじみと余韻が残る一句。

手焙に客の寄り来る朝の市　横川良子

「手焙」は手を温めるだけの小さな火鉢。今どきは珍しい存在と思われるが、寒い朝市、親しい客が買い物はともかく手を温めに手焙に。世間話の声が聞こえて来そうな、昔ながらの風景。

スーパーマーケットでの買い物には無い人々の交わりを見た句。

切株にまた入れ替はる月の客　下嶽孝一

この切株は人が掛けやすい大きさ、然も見晴らしの良い、ひと休みしたい所にあると想像される。もしかすると、作者も利用者の一人かもしれない。

月を愛でる国民性、切株でのお月見の景は俳句ならでは。

補聴器の電池買ひ足す年用意　疋田華子

年末に新年を迎える為に色々な用意をする「年用意」。大方の用意を済ませて買い足したのが「補聴器の電池」。

この句が独創的でない時代が来ているのかもしれない。高齢化社会にあって、俳句が社会の鏡とも言える一句。

茶の花や雲剝れゆく朝の富士　加山ひさ子

北海道に住む私は「茶の花」を見たことが無い。初冬の頃、白い五弁の花が咲き、良い香りがすることを知った。

茶の花と富士山の贅沢な一句。「朝の富士」が清清しい。

全国誌の「万象」から各地の風土性、歴史、土地柄を知ることが出来る。眼前の景を大切に。

銀杏落葉枯山水の波の間に　本多ひとみ

墨絵のような静かな庭園の枯山水に、銀杏の落葉が散りかかり、少しの風にも揺られている光景が想像出来、枯山水と言えどもあたかも波の音まで聞こえそう。

沢木先生は「俳句は文芸」と教えてくださったが、説明や報告は余計なお世話。詩心を養いたいものである。

弟は兄追ひ風は落葉追ふ　成瀬真紀子

この兄弟はまだ小学生か？　夕方になって、落葉が舞う道を走って家に帰る様子が思い浮かんだ。

何気ない日常の風景ながら、「風は落葉追ふ」で印象が深まった。秋ならではの景。

たたなはる遠嶺に映ゆる冬夕焼　高田たみ子

「たたなはる」は「畳なはる」で『万葉集』にもある古語。遠方の山並が冬夕焼に染まっていることが分かった。

同出句に「冬紅葉」「冬の薔薇」があるが、名詞に「季」を付けるだけでなく、俳句は「季」自体を詠みなさいと、私はよく叱られた。

六畳の明り障子や根岸庵　中川雅月

俳句を学ぶ人なら一度は必ず訪れる正岡子規の旧居。何回言っても、何時行っても飽きることはない。

掲句の「根岸庵」はどうしても馴染まない。

病牀六尺のあの部屋での一句。〈子規庵の明り障子や六畳間〉。一句で如何に多くの意味を想像させるかが勝負。同出句〈枯尾花背丈を超えて鉄路錆ぶ〉も、〈鉄路錆ぶ背丈を超ゆる枯尾花〉でなければ意味が通らず、すっきりしない。

番号で呼ばるる医院そぞろ寒　岡田あゆみ

カルテの番号か来院順かは分からないが、番号で呼ばれるのには抵抗がある。人間より番号が優先される世の中になって味気ない思いをすることが多く、それを「そぞろ寒」と受け止めた。軽みの一句。

釣鐘に千年の樹の枯葉降る　入河大河

一読、報告句と思ったが、何しろ千年の「木」ではなく、「樹」であることに感慨が深まった。何の樹か分からないのが残念であるが、この樹が聴く春夏秋冬の鐘の音。私も耳を傾けたい思い。長寿の樹も、人間の冒す地球温暖化で存続があやぶまれる時代になったのが、悔やまれる。

蔵の街

上岡佳子

見世蔵の奥に展ぐや菊花展
白壁に色の付きさう蔦紅葉
小春風歌麿館の藍暖簾
花魁の船で手を振る秋まつり
綱手道色たびの子ら踊り出す
秋灯早や土蔵造りの支局かな
舟見茶屋鉄瓶滾る箱火鉢
「深川の雪」落札の朝残る月
冬帽の見入る歌麿三部作
例幣使街道男体颪かな

栃木市は、江戸時代日光例幣使街道の宿場町で、中心部を流れる巴波川の舟運の要所として栄えた。今も変わらぬ重厚な構えの見世蔵が大通りに立ち並ぶ。元麻問屋、回船問屋、旅館、呉服屋、薬舗等々16棟にも及ぶその佇まいは、当時の繁栄を彷彿させ、蔵の街小江戸と称される。豪商は江戸に屋敷を構え、江戸の経済人や文化人と深交があったと伝わる。昨年の大河ドラマの蔦重や歌麿も栃木に縁が深く、歌麿の大作三部作は栃木で描いたという説がある。華やかな市政15周年だった。

雪に暮らす

北浦詩子

肩に来てふわり雪虫二三匹
冬至の日いよよ迫りし覚悟かな
深々と気配を消せり真夜の雪
いちどきに白線消ゆる雪の朝
雪に暮らす今日の一日抗はず
窓の霜連なる枝のごと咲けり
結氷の川辺に小さき水の音
町光る雪解雫の其処此処に
木の根明く狭庭に雀来てをりぬ
春隣午後の明るさ縹色

北国に住む者にとって、雪は楽しいものではない。今季のような大雪に見舞われると、人も車も身動きが取れず、学校も臨時休校に。道端には背丈を超える雪が積まれ、閉塞感を覚える毎日だ。

雪掻きに追われ嫌気がさすものの、春の日差しを感じると、この上ない解放感に満たされ、心が華やぐ。

だからこそ、雪を受け入れられる。冬来りなば春遠からじ。日ごとに雪嵩が減る今、見上げる空にときめいている。

特別作品評 (3月号) 荻野加壽子

冬晴の海

大橋雅子

子等の声海一望のみかん狩

みかん山は概ね海に面した温暖な所にある。「子等の声」に明るい日差しと潮風が生み出した美味しいみかんを堪能している姿が浮かんできた。ご家族との楽しいひと時が句になった。

冬晴や出航の銅鑼響きたる

娘さんご夫婦に誘われての東京湾クルーズだったそうだ。腹の底まで響き渡る船出の銅鑼の音。この後の出会いに期待が膨らんだことだろう。

「冬晴」の季語がその気持を一層盛りあげてくれた。

霜月の空に屹立スカイツリー

ふだん地上で見る建造物や風景を船上から見てみると印象が大きく変わる。外は霜月のやや肌寒さが感じられる頃、大窓から見るスカイツリー。東京タワーとは違うそれは、「空に屹立」なのである。

赤いクレーン冬の埠頭に林立し

円筒型工場でんと冬日浴び

東京湾沿岸には京浜工場地帯が広がっている。最近、東京湾クルーズだけでなく、各地で工場夜景を楽しむナイトクルーズなども人気である。

今回はナイトクルーズではないかもしれないが、作者の言葉にあるように、建造物だけでなく工場群や海上にも新たな発見があったようだ。視点を変えてみることは俳句作りにも有意義なこと。

それを実践された新鮮な連作である。

大鳥居

中川雅月

年明くる一番太鼓大鳥居

敦賀市の氣比神宮は作者の言葉にあるように『古事記』や『日本書紀』にも登場する古社である。社殿のほとんどが先の第二次世界大戦中の空襲で焼失したため、現在の主な社殿は戦後の再建だそうだ。だが空襲を免れた大鳥居は「日本三大木造鳥居」の一つとされている。

それゆえに敦賀の方たちにとって大事なもの、その思いが表題句となった。

校舎横入学式の土公神

一読した時には「土公神(どこうがみ)」と学校とのつながりがわからなかったが、調べてみると五年ほど前に閉校となってしまった小学校の敷地内にあるらしい。土公神とは陰陽道で土を司る神。今は入学式もないだろうが、きっとこれからも子供たちを末永く見守ってくれることだろう。

石亀吐く長命水や涼を呼び

御祭神が無病息災や延命長寿の神であることから「長命水」の名がついたようだ。千三百年涸れずに湧き続けていることとあって、ご利益がありそうだ。

「涼を呼び」に近年の猛暑を耐え抜く力を皆に与えてくれる貴重な場所だということがわかった。

ユーカリに樹医の手立てや秋深き

90年前に陸軍関係者が氣比神宮に武運長久を祈願して献木されたものとか。長い年月を風雨にさらされた大木を見守り続ける方たちの温かい心が、「樹医の手立てや」の措辞に感じられた。

私のこの一句

青楓伊代次句碑まで百余段　柳澤宗正

伊代次の句碑は松本と静岡にもあるが、この句碑は神奈川県の大山阿夫利神社下社の裏手、大山の登山口にある。大山は雨降山とも言い、阿夫利神社は農家にとって大切な雨乞いの神様。黒御影の句碑には〈豊作をたたへ大山仰ぎけり〉と刻まれている。平成2年「風」主宰沢木欣一氏他大勢集まり句碑開きが行われた。神社の裏口から句碑まで百余りの急な石段があり昇降が大変である。石段の手前の境内には植樹の楓がある。この句は伊代次没後8年の令和元年の初夏、伊勢原へ吟行した折の作。同人に推挙されて数年経っていたが、亡兄伊代次の句境には程遠い事を痛感していた頃でもある。

胃ろうにも耳かきほどの冷奴　大内和憲

進行性の全身麻痺のため、口からの食事は誤嚥を生じるため不可能となり胃ろうによる食事となった患者さん。殆んど寝たきりの状態。要介護度は5。会話は出来ない。誤嚥性肺炎を防ぐため往診を続けている。食事はパックに入った栄養食を胃壁に直接開けた穴より胃に送りこむ。最初は看護師が行っていたが、今は家族が行っている。家族が季節のものを食べる時、きっと本人も欲しいだろうと、同じものを胃ろう食に「耳かきほど」混ぜ、皆で楽しみを分かち合っている。

曇天や別れ烏の声いとど　大村かし子

令和4年1月号「万象」誌同人作品の佳句に載りました。リビングの真向いの黐の木に作った烏の巣の様子を毎日窺っていると、親烏は周りを気遣いながら子烏に何度も巣立ちを促していました。或る日子烏は巣から離れ飛んで行きました。しばらくの間、親烏の大きな鳴き声が聞こえました。親烏と子烏の別れです。歳時記に秋の季語「別れ烏」が載っており、早速この句ができました。今は亡き内海先生に、「かし子さんの会心の作！」との講評を頂き、大変有難く忘れられない句となりました。

句集鑑賞

柳澤宗正『遠富士』

令和8年1月、「万象」顧問・柳澤宗正（ときまさ）氏の句集『遠富士』（「文學の森」刊）が上梓された。句集の帯には「米寿記念出版」、「俳句で綴る我が後半生」とあることから、この句集編纂の宿志を知ることが出来る。

柳澤宗正氏は昭和13年長野県東筑摩郡に十人兄弟の七男として生まれた。中学を出ると、県下でも名門中の名門として知られる松本深志高校に進学、東北大学経済学部に学ぶ。卒業後は住友化学工業に入社して、定年後は関連商社の社長に就任して平成15年までその重責を果たされた。

詩吟に深く関わっていた氏が、俳句の道に足を踏み込むことになったのは、長兄で「万象」創刊主宰であった瀧澤伊代次氏の影響によるところ大であった。年齢の離れた兄に寄せる思いがことのほか深いことは、俳句のみならず、「万象」俳句会に示してこられた熱量によっても明らかである。

平成14年「万象」創刊と同時に入会。平成23年に新人賞を受賞して同人となり、その後は神奈川県支部を束ね、同人会会長を務め、令和4年顧問に推挙され、現在に到っている。

本誌では、江見悦子主宰をはじめとする8名の同人から句集の鑑賞文を寄せていただいた。

自選十二句

お年玉婆の煮豆をほめにけり
破魔矢受く巫女の手許に計算機
十人を育てし妣や針供養
映るものみな影崩し水温む
海に出て揉まるるばかり花筏
声明に頭をもたげ青蜥蜴
赤ん坊の寝顔へかげる青楓
ちちろ鳴く永久の別れの朝かな
遠富士や伸び縮みして鳥渡る
敷藁の先へ咲き継ぐ南瓜かな
金婚祝煮凝り一皿足しにけり
阿夫利嶺の雲のちぎれて神渡し

（編集部）

優しさと批判精神

江見悦子

拝読し、多くの弔句が印象に残った。2月に米寿を迎えられる宗正さんであってみれば、ご友人、ご親族への弔句は自然なことなのかもしれないが、長年周囲の方々と親密な関係を築いて来られた作者の、誠実さと優しさを思った。

〈十人を育てし姚や針供養〉の句に、お兄様瀧澤伊代次「万象」初代主宰の句〈十人を産みし肩幅踊るかな〉との絆を感じた。明治、大正、昭和を生きたお母様の信濃の地に培われた生命力、その力を継いだ宗正さんは、元主宰の「実作の態度・方法として即物具象の写生により、万物の命の輝きを詠む」を真直ぐに学び、引き継ぎ、進化させて来られた。沢木欣一先生の「風」以来、「万象」は社会性豊かな句を守ってきた。それを大切にしている句を挙げたい。

忍び寄るコロナウイルス月氷る（大型客船の集団感染）
キーウバレエ見しより秋思深まりぬ（ロシアによるウクライナ侵攻）
米櫃の底を穀象這ひまはる（令和の米騒動）

人と人で成り立つ社会をがらりと変えてしまったコロナウイルス、未だに収束を見ないロシアの蛮行、猛暑に始まった日本の米政策の諸々の課題、これらを、広い視野で俳句に取り上げた作者の批判精神に敬服する。

「万象」顧問として今後とも様々に御批正をお願いしたい。

句集を読む楽しみ

小林愛子

柳澤宗正氏が、句集『遠富士』を上梓されたことは嬉しい驚きでした。「米寿記念出版」の俳句による自分史、おめでとうございます。氏の折り目正しいお人柄に感銘いたしました。兄上である瀧澤伊代次先生は、私の師でもありましたがお元気でしたら喜びは如何ばかりかと、感無量です。

遠富士や伸び縮みして鳥渡る

どっしりと座る遠富士。「伸び縮みして」の言葉を得て、句は俄かに立体的に。句集の白眉ともいえる句です。

伊代次句碑ぬぐうてをれば小鳥来る

句碑は大山阿夫利神社下社に。句碑建立は大変困難でしたが、もはや伝説となった。沢木先生を羨ましがらせた句碑。

部屋に君ゐるがごとくに水仙花

遠き日や父に習ひし蘗砧（生家回想）

映るものみな影崩し水温む

一句目、今ここに愛する人がいない。高い香りと立ち姿の美しい水仙に、人恋しさは募るばかり。二句目、若い父から手に取って教えてもらった蘗砧。過ぎ去った日日へのノスタルジアに似た思いは一気にせり上がる。三句目、終末の哀歓に「水温む」は希望の証。あまたの堂々たる句の中にあって、ふっと息を抜いた句に出会うのも楽しみの一つである。

人に歴史ありとかや

中村千久

山国の信州には「澤」の字の付く苗字が多い。柳澤さんが瀧澤伊代次先生の弟御であると知ったときは、妙に納得したものだった。そして、そんな信州で青春時代を送り、勝手に第二の故郷であると思っている私は、「万象」での出会いに、何がなしかの縁を感じたりもしたのである。

編年体で編まれた句集の「『万象』以前」の冒頭に置かれて、「信州 三句」と前書のあるうちの〈草茂る少年の日の峠道〉という若詠みの一句は、まさに我がことのように懐かしい思いを膨らませてくれた。また、続く章にあって「高校同級生」と前書した〈ともがきの語らひ熱き火鉢かな〉にも、大いに共感することとなった。天下の俊秀が集まる松本深志高校の同級生たちとの時を経ての邂逅。互いに様子は変わっていたことだろうが、火鉢を囲み酒を酌み交わしするうちに、時の流れは一気に巻き戻されたことだろう。

海外勤務も経験された氏は、旅行も楽しまれたようで、ドイツでは〈夏霧の晴れて古城の現るる〉、トルコでは〈文明の十字路に立つ夕月夜〉と次々に詠んでいる。経済人だけに、イギリスのEU離脱には〈英国よ何処へ行くや薔薇動く〉と詠んで、心騒ぐ胸のうちを吐露して見せたりもしている。

たくさんの句に前書が添えられたこの句集。〈餌台に目白が来しと初電話〉には「孫」とある。このお孫さん、いつか爺さまから俳句を教えられたようである。いずれは『遠富士』を教科書として、次代の俳句界を先駆けるかもしれない。

真っ正直な句に感動

福島せいぎ

今年初めて届いた句集が柳澤宗正さんの『遠富士』であった。私にとって富士山は夢の中の山だが、柳澤さんは「四季折々、この遠富士を眺めて暮らしている」と記している。

句集名は、集中の句〈遠富士や伸び縮みして鳥渡る〉に由来する。秋の澄み切った遠富士を背景に渡ってゆく鳥の群れをこれほどまでに的確に表現している句は外に知らない。柳澤さんの代表句として今後も高く評価されよう。

柳澤さんに初めてお目に掛かったのは「万象」創刊の頃である。私とは同い年で、二人共寅年、誕生月も近かったのでなんとなく親しみを覚えていた。私は「風」を経て「万象」に参加したが、柳澤さんは「万象」の歴史と共に歩んで来られた。いわゆる「万象」の生え抜きである。柳澤さんの句は、「あとがき」に記している「即物具象の写生により、万物のいのちの輝きを詠むこと」に徹している。又、この句集を「俳句で綴る我が後半生」と述べているが、米寿記念にふさわしい句集となった。

一読まことに爽やか。どの句も衒いがなく、真っ正直で嘘がない。柳澤さんのお人柄そのままの印象を受けた。

お互いに健康に気をつけて、二年後の卒寿を目指したいものである。

一本に繋がるストーリー

中條睦子

『遠富士』は米寿記念にと出版された句集。あとがきによると「俳句で綴る我が後半生」とも記されている。

遠富士や伸び縮みして鳥渡る
富士見ゆる居間や二人の七日粥

「居間より見える遠富士を四季折々眺めて暮らすことから句集名を『遠富士』とした所以である」と述べている。

ちちろ鳴く永久の別れの朝かな
長き夜の長き語らひ伊代次の忌
伊代次句碑ぬぐうてをれば小鳥来る

「万象」の初代主宰を勤められた、故瀧澤伊代次氏を兄とする作者ならではの思いの籠った作品に惹かれるものがあった。

餌台に目白が来しと初電話

お孫さんの成長を楽しみにしている作者の喜びが窺われる。

産卵の果てに骸(むくろ)のひきがへる
蟬の穴地上に星座あるごとし

などの生き物へ向けられる温かいまなざしも印象的である。

語り合ふ余命いくばく根深汁

重い話題であるが、「根深汁」がその場の空気をさりげなく醸し出している。故郷、家族愛など、一本に繋がるストーリー性が感じられる句集であった。

装画の富士山は自身の生きざま

吉中愛子

宗正さんとは三年間ご一緒に、同人会のお世話をさせていただきました。その間はいつも頼りっぱなしで、苦労もなく楽しい時間でした。今も時々伊勢原句会にも参加して下さり励まされています。今回は感謝をこめて、句集『遠富士』を鑑賞させていただきます。

故郷を愛され家族を愛され旅を楽しまれた様子が句域の広さから伝わります。「信州」と前書きされた十九句の中〈春炬燵囲むはらから喜寿米寿〉〈車座に渋柿をむく夜なべかな〉男ばかりの十人兄弟。一家には「農繁期には皆で田植えを、農閑期には山へ植樹を」という家訓があったようです。家の中は、大家族ならではの賑やかさ。だからこそ労りも優しさも育ったのでしょう。よく働いた母親の姿は男に混じり〈尻並べ斜面の畑を打つ女〉〈十人を育てし妣や針供養〉。

妻への愛情も〈牡蠣鍋やひよいと妻にも酒を注ぐ〉「ひよいと」に照れた感じがあり、尊敬し合ったお互いの距離感が見事に詠まれています。

平成15年には自分史として『我が半世紀』と題された著書を、遺言のつもりで既にご家族には渡されているとのことですが、その几帳面さは「著者略歴」にも窺い知ることができます。そして、米寿記念として出版された句集『遠富士』は、「俳句で綴る我が後半生」という記録である故に前書が多いことも、あとがきを読んで納得しました。

端正なあたたかさ

榎本文代

『遠富士』を開くとまず「信州三句」と前書のある故郷の句が並ぶ。独学で俳句をなさっていた「万象」入会前の作品である。米寿記念として上梓された句集からは、帯にある「俳句で綴る我が後半生」との作者の思いが伝わってくる。

遠富士や伸び縮みして鳥渡る
遠富士の襞に雪ある梅雨の明
遠富士や鶴瓶落しの茜雲
富士見ゆる居間や二人の七日粥
初冠雪の遠富士窓に皿洗ふ

句集名にもなった富士を詠んだ句をいくつか抜き出してみた。即物具象の写生の句はどっしりとしていて端正で、日常に目を配った句からはどこか温もりが伝わる。

昨年の事、吟行会で思いもかけず柳澤さんの〈書初や妻の手本をなぞりたる〉という短冊をいただいた。短冊の文字は細やかで整っていて優しかった。

爽やかや雅号得し妻書に向ふ

後日、句集にあるこの句に出会って納得した。奥様は書道の師範であった。

『遠富士』には奥様をはじめお孫さんたちへ寄せた句も多い。あとがきは家族への感謝の言葉で結ばれている。端正であたたかい句集である。

遠富士と渋柿

大久保進

句集名となった「遠富士」は、居間より眺めて暮した富士山・遠富士に由来すると記されている。四季折々に詠まれた遠富士の景観は、一服の清涼剤のように見える。

遠富士の襞に雪ある梅雨の明
遠富士や伸び縮みして鳥渡る
冬夕焼連山影絵見る如し

三句目の「冬夕焼」の句は、前書に「富士・丹沢塊」とあるので、影絵と化した連山の奥に富士の存在を認識することになる。敢えて富士を句中に出さず、連山の中に溶け込ませたことで、夕焼けに沈む連山のスケール感を引き出している。

生家回想の句には、ふるさと本郷村（現松本市）の風土色を帯びた、人間味あふれる生活実感の濃い句が並ぶ。

春炬燵囲むはらから喜寿米寿
車座に渋柿をむく夜なべかな
父の背に母のかけやる負真綿

二句目の「車座に」の句は、「渋柿を剥く」ところから始まる干し柿作りの様子だろう。大家族そろっての夜なべに、時が静かに流れてゆく。郷愁を誘う生活詠である。

この句集は「俳句で綴る我が後半生」である。一句一句が余韻と人生観を感じさせる。

北から南から

「臼井宿」

千葉　横川良子

うすゐ句会

故内海良太先生のもと始まった「うすゐ句会」。35年余り毎月第三月曜日に私たちが住んでいる町会自治会館で句会を開いている。あらためて、長きにわたり良太先生のご指導を頂いたことに心より感謝申し上げます。

田久里砦

会館の傍らを走る国道296号線を逸れて、田繰坂という粘土質の急坂を上り、台町に続く道が旧成田街道。因みに会館のあるこの地は、臼井城の五カ所の砦の一つで「田久里砦」と呼ばれ、以前は鬱蒼とした樹木に覆われていたそうだが、開発により砦の原型は不明。団地内の公園に砦の由来について書かれた看板があるのみとなっている。

臼井宿

臼井は元来、印旛沼を含めた水陸交通の要衝で、旅人の往来も多く、宿場町としての形を整えていった。

上杉謙信でも落とせなかった臼井城は、印旛沼に注ぐ手繰川と鹿島川に挟まれた下総台地に位置している。城は15世紀に臼井氏により築かれたが、その後、原氏、次に徳川家康の家臣酒井氏が城主となるも、城は火災により焼失。後に廃城となった。現在は印旛沼が一望できる城址公園として整備されている。

元和3年（1617）家康の側近土井利勝の手で、新佐倉城が完成し、北総における軍事・政治・経済の中心となって佐倉最寄りの駅宿「臼井宿」の果たす役割は大きくなり、旅籠・問屋・人馬の継立場など、駅宿として整備されていった。

五代将軍の徳川綱吉の時代、江戸町民の成田不動詣でが盛んになり、佐倉道も「成田みち」と呼ばれるようになった。成田詣での講などもあり、成田街道沿いの宿場は大層賑わったと言われる。句会に参加していた地元の古老によると、江戸から明治の台町（宿場町）の成田みちは、成田参詣の人通りが多く、道を渡るにも苦労するほどの賑わいであったとのこと。

明治22年の官道修築事業により、新道ができ（現在の国道296号線）さらに大正15年に津田沼～酒々井間に京成電鉄が開通するのを契機として、臼井に立ち寄る旅客が激減し、宿場は賑わいを失っていった。臼井宿のあった地域は、かつての繁栄を偲ばせる遺構も少なく、現在では「成田みち」と記された道標を見るのみである。

下萌や子規も辿りし成田みち　　良子

新同人競詠作品評

江見悦子

星月夜

静岡　松永博子

吟行が好きという作者、又「自分なりの表現で十七音を紡ぎ、詩としての俳句を」「取合せの句をどうまとめていくかが一番の課題」ときっちりと方向を見定めている。

ふうはりと溶きたるたまご菜種梅雨
靴音の遠のきにけり星月夜
ハイエナのコンクリート舎そぞろ寒

一句目、季語「菜種梅雨」について歳時記には「『菜種』はア音が続いて明るく、『梅雨』はウ音が連続して籠ったような暗さが加わる」とある。この季語と「ふうはりと溶きたるたまご」との取合せの句。たまごと菜種の黄の明るさ、上五中七の軽やかさと下五の暗さに、陰翳のある句となった。

二句目、季語「星月夜」が美しい。月が出ず星明りの明るい夜、姿は見えないが靴音が遠のいていく。秋の澄んだ空気の中、ハイヒールの硬い音が響く。空間を音で切り取った。

三句目、動物園での即吟か。動詞がなく、眼前のモノを名詞で畳みかけ、季語が「そぞろ寒」。それとなく感じるほどの寒さであり、心理的な気分も含まれる季語である。故郷から離れてコンクリート舎に暮らすハイエナに寄せる、微妙な気分を詠んだ。

今後はゆったりとした時間の中でお仲間と俳句を楽しみ、良い句を作り続けて下さい。

梯子乗

武蔵村山　松井宣夫

昭和33年生まれ、60代の行動派の若手である。「万象ノオト」に度々掲載される原稿からも、好奇心旺盛でチャレンジ精神にあふれた人物像が窺える。

鳶口に命を預け梯子乗
初羅の市場に響く祝詞かな
漢方堂亭主自慢の猿茸

一句目、「梯子乗」が新年「出初」の副季語。消防関係者が6日に行なう初出勤の儀式である。鳶口とは、棒の端にトビのくちばしのような鉄製の鉤をつけたもの。江戸時代の町火消し（とびの者）が用いていた。この句、何人もの鳶が梯子の下に長い鳶口を引っ掛け、梯子を真直ぐに支えている場面。梯子の天辺では伝統の曲芸が披露されている。まさに「命を預け」である。

二句目、作者の職場だった大田青果市場の初羅を詠んだ。新年最初の行事である。いつもは大声が飛び交い台車の行き交う市場に、今日ばかりは安全を祈る神主の祝詞が響き、男たちが神妙に頭（こうべ）を垂れている。

三句目、漢方薬を商う老舗の主が、手に入れた猿茸（ましたけ）について自慢の講釈、作者は興味津津で耳を傾けている。

今後は即物具象の写生の眼を養い、視野広く行動的に、個性を生かした句を作っていって下さい。

神名備

金沢　松田好子

金沢に生まれ、学び、金沢の地を離れずに暮らす松田さんは多趣味で何事にも熱心、今や俳句を心の拠り所としてお仲間と共に、俳句を楽しんでいる。

青空へ溶け白鳥の点となり
神名備の鶏と目の合ふ小六月
手のひらに霰へてゐたり雪螢

一句目、青空を仰いで白鳥を追う作者の目にいつか白鳥が点のように小さくなってゆく。晴れわたった空である。遥かなるものへの憧れと哀惜の心、青と白の対比が、いつか青に収斂してゆく美しさを感じた。

二句目、「神名備（かんなび）」とは神の鎮座する山や森。神社の森をいう。長い歴史を持つ社なのだろう。飼われている神の鶏と目が合った、と思った瞬間の不思議さ、心の弾みを詠んでいる。本格的な冬が来る前の穏やかな日和をいう季語「小六月」の斡旋が成功した。

三句目、繊細な句だ。空中で掬い取った「雪螢」を「手のひらに震へてゐたり」と詠んだ。たちまち消えてしまいそうな、はかなく微小な生き物の命に迫ろうとしている。いずれの句も、すっきりとして形が良い。

これから益々モノと自分との距離を縮め、心に沁みる句を作ってください。

無常

松山　入河大河

昭和38年生まれの若手。「万象」創刊時に入会以来、いくつもの句会に参加して俳句を学び、定年退職後は故郷愛媛県の離島で俳句を楽しんでいる。

色変へぬ松を左右に桜田門
ビル火事や無常の煙立ち上り
猟犬の尻込みしたる鳥の糞

一句目、久しぶりに上京し皇居の辺りにやって来た作者。誰でも入ることができる外桜田門が一般的には桜田門と呼ばれ、現存する江戸城の門として最大規模。美しく整えられた「色変へぬ松」が桜田門にふさわしい。

二句目はチャレンジの句。眼前に見たビル火事を「無常の煙」で捉えている。ビルの窓から噴き出る火炎と煙のすさまじさを思い浮かべ、「無常」という言葉に『方丈記』の一節を思い出した。朱雀門、大極殿までもが塵灰となった安元3年4月の大火事について詳しい記述があり、作者鴨長明は人の世の無常を「朝顔の露」に喩えている。時代は違っても思いは同じである。

三句目、「猟犬」が冬の季語。昂っていた猟犬が、鳥の糞にたじたじとなっている可笑しさ。俳味のある句。

今後とも、多作多捨の精神で句を作って下さい。島からの投句、楽しみにしています。

枇杷の花

市川　奥澤よし江

散歩が好きな作者は「風と遊ぶ自然児」を自認しているとか。俳句を続ける中で「五七五への表現、言葉の力」を考えるようになったという。

松籟や初声くぐる大鳥居
粉雪の紙垂にまとはる神楽殿
人知れず匂ほのかに枇杷の花

一句目、新年の句。「初声」とは、鳥の初声。まだ恋の季節には遠く囀りとはいかないが、やはり新年改まっての鳥の鳴き声は格別である。「松籟」は松に吹き通る風、又その音をいう。元旦の初詣、大きな鳥居をくぐると、鳥の声も一緒にくぐったように聞こえた。境内には松籟が響いている。新年を迎えるにふさわしい気持の良い朝である。

二句目、すっかり開け放たれ拭き浄められている神楽殿に粉雪が降りかかっている。今日は神楽の予定があるのか、注連縄には紙垂が垂らされ、粉雪がまとわりつくように紙垂を動かしている。的確な表現で粉雪と紙垂の小さなドラマを詠んだ。

三句目、枇杷の花は緑濃い葉の中に固まって咲く地味な花だ。風に乗ってふっと匂う時に初めて枇杷の花の存在に気が付いたりする。「匂ほのかに」に共感する。

まっさらな心と瑞々しい感性で自分らしい俳句を作っていって下さい。

かくれ里

金沢　井端久子

「かくれ里」は、琵琶湖北端に位置する菅浦集落のこと。氏神として古い歴史を持つ須賀神社がある。吟行の成果をまとめた作品群から3句。

奥宮へしなやかに消ゆ穴まどひ
魚粉煮る煤けし竈草の花
鳥渡る湾に沿ふ村弓なりに

一句目、須賀神社は山腹に位置し、手水舎から拝殿までは土足厳禁、スリッパに履き替えて上るという珍しい神社。拝殿の先で「穴まどひ」に出合った作者は、奥宮へと消えて行ったそれを、「しなやかに」と詠んだ。秋の爽やかな光と空気の中、全身を伸ばして消えてゆく蛇の美しさ。

二句目、菅浦集落の民家では煤けた竈で魚粉を煮ていた。濃い魚介出汁をとっているのか。道にも匂いが漂っている。季語「草の花」が逞しくも可憐、この地を故郷にして生きる人々の姿を思わせる。

三句目、冬鳥が北方からやってくる季節となった。小さな湾に沿って綺麗に弓なりを描いている湖岸集落は、これから厳しい冬の季節を迎える。

「風港」終刊に伴い、会員として「万象」に入会されて2年足らず、お住いも金沢に落ち着かれたようです。今後の益々のご健吟を祈っています。

通りすがり

那覇　辺野喜宝来

俳句を学び始めて20年詠んでいるという辺野喜さん、日本語が母国語でないため挫折感を味わいながらも、「ふう句会」に入ってからは句作が生きがいになったという。

石獅子の口のゆるびや冬あたたか

海光や通りすがりの葱畑

花甘蔗の高きへ風と波音と

一句目、沖縄の村の入口や三叉路に置かれた石造りの獅子像が「石獅子」。悪霊や火災等の災いから地域を守るためのもの。この句、いつもは引き結ばれている石獅子の口が。あたたかな冬の日に緩んで見えたという。のどかな句。

二句目、タイトルともした「通りすがり」という日常語が面白い。「海光」は海面が太陽の光を受けて輝く様子。葱畑は海の傍に広がっているのだろう。沖縄では暑さに強い葉ネギが主に栽培されるそうで、真直ぐ伸びる高畝に青い葉が勢いよく並ぶ葱畑を目に浮かべた。「通りすがり」に目にした印象的な情景を詠んだ。

三句目、沖縄の甘蔗が花をつけるのは冬の甘蔗の収穫期。茎の天辺に白くふわふわとした花穂となる。その頃から風が強くなり、海も荒れるようになる。「高きへ風と波音と」と素直にリズムよく詠んだ。

遠く離れた沖縄の句をいつも楽しみにしています。お仲間と一緒に元気に句作を続けて下さい。

俳句

巻頭作品50句『池田澄子
作品21句『今瀬剛一・藤本美和子

5月号予告

4月24日発売
予価1,300円(本体1,182円)⑩

大特集
「はたらく」を詠む
【総論】「働き方改革」と俳句……神野紗希
【鑑賞】仕事の名句30選……村上鞆彦
【エッセイ】山内繭彦・福永法弘・押野裕・星野愛・黒澤麻生子・矢野玲奈・抜井諒一
【北大路翼「給食のをばさん」】ショートインタビュー……北大路翼
一句鑑賞……高野ムツオ・鳥居真里子・小林貫子・小川軽舟

句集特集 森岡正作句集『鮎の川』

大人気連載
はみ出せ！俳句……夏井いつき
小林秀雄の眼と俳句……青木亮人
飯田龍太の世界……廣瀬悦哉

季寄せを兼ねた俳句手帖 夏

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団　発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

子規の写生論の展開（六）

高木良多

四　時間と空間

次に、子規の著作の中から子規の写生論を抽出し、最晩年の変化についてふれてみたい。

子規は「俳諧大要」の中で、

俳句は文学の一部なり　文学は美術の一部なり
故に美の標準は文学の標準なり　文学の標準は俳句の標準なり　即ち絵画も彫刻も音楽も演劇も詩歌小説も皆同一の標準を以て論評し得べし。

（「日本」明治二十八年十月二十二日）

として、俳句は絵画と同一の美の標準をもって論評することができると、きわめて明快なる論理で、写生俳句の根本義を示した。

芭蕉の俳風が「風雅の誠」を根本義として哲学的であるのに対して、子規俳句は「美」を標準とする文学であると規定する。子規俳句が芭蕉俳句と種類を異にするものであると述べてきたのはそこから来ているのである。さらに

我は宇宙到る処に美を発見せざること無く又不美を発見せざること無し。美と不美とは各或る一部分に偏在するものに非ずして各遍満する者なるを信ず。故に我は何れの部分よりなりとも美を捉へ来りて之を写さんと欲す。若し為し得べくんば総ての変化せる部分より美を捉へ来りて之を写さんと欲す。

（「世界之日本」第三号、明治二十九年八月二十五日）

として、美を写生することをモットーとすると述べている。

次にその美を写生する方法について、

時間は空間の変動に因りて始めて知覚せらるるべき者にして時間を現さんとせば是非とも空間を現さゞるべからず。即ち絵画には時間を含まざること あるも文学には空間を含まざること能はざるなり。然るに俳句の如き短き者に在りて時間空間共に之を含ましむることは分量の上に於て極めて出来難きことなるを以て寧ろ両者の一を択ばざるべからざるの必要起る。此必要に応ぜんとするも時間許りを時間許りを写すことは出来得べきにあらねば已むなく空間許りを写すの勝れるを見る。

（「日本」附録週報、明治三十年一月十一日）

すなわち、これを要約すれば、写生の方法に、

一、静止している静物とか自然とかをそのまま空間的に写生する方法。

二、対象となる静物とか自然とかはいつまでも同じ状態でいるとは限らない。次の瞬間には変化するから、その変化を写生する方法。

三、空間の変化により時間が発生してくるので、時間を伴った空間を写生する方法。

以上のような方法があるが、俳句のような短いものにあっては時間空間をともに含ませることは分量の上においてきわめて困難であるから、どちらか一つを択ばなければならないが、空間を写生する方法の方が勝っているのであると子規は述べ、その上で、一方、時間ばかりを写生することはでき得べきにあらずとした。

（次号につづく）

『子規・写生―没後百年―』（沢木欣一編　角川書店）より抄出

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ㉝

橋本　清

若ければ　道行き知らじ　賄はせむ
下への使ひ　負ひて通らせ　（五・九〇五）

「まだ幼いから、黄泉路の行き方も知りますまい。必ずお礼はしますよ。黄泉の国からのお使いの方、どうかおんぶして連れて行ってくだされ。」

山上憶良が息子古日の死を悼んで詠んだ歌。長歌に添えられた一首です。

「賄」は「マヒナヒ」のマヒで、特別に便宜をはかってもらった謝礼に贈るもの。「下へ」は下の方ということですが、ここは死んだ人が行くとされる地下の世界、すなわち黄泉のことを婉曲に言っています。

先立って逝ってしまう子に、親として何か最後にしてやれることはあるのでしょうか。この歌は、袖の下を渡すからこの子を背負って連れて行ってくれと、黄泉の国から迎えに来た使者に頼んでいるのです。勿論、それはすべて空想。空想の使者に空想の賄賂。何とはかない願いでしょう。しかし、そんなはかなさにすらすがろうとする親の悲痛な訴えが胸を締めつけます。

「古日」がどんな子であったかは結句の「負ひて」でおよそ見当がつきますが、次に挙げる長歌の一部分を読むと、もっと具体的にその姿が想像できるでしょう。そして、改めて表題歌と併せ読むと、ますます切なくなります。

……白玉の　我が子古日は　明星の　明くる朝は　しきたへの　床の辺去らず　立てれども居れども　共に戯れ
夕星の　夕になれば　いざ寝よと　手を携はり　父母も　上はな離り　さきくさの　中にを寝むと　愛しく
汝が語らへば……　（五・九〇四）

「（白玉の）我が子古日は、（明星の）朝になっても、（しきたへの）の寝床の辺りを離れず、立っていても坐っていても、一緒にはしゃぎ回り、（夕星の）夕方になると、『さあねんねしよ』と、私の手を引っ張り、『お父さんもお母さんも僕のそばから離れないでね。（さきくさの）中にはさまって寝るんだ』と、愛らしくお前が頼むから……」

近代歌人木下利玄は、大正元年8月、幼い長男利公に先立たれた時、「利公の為めに」と題して、31首もの歌を詠み、その死を悼みました。その中からただ一首を選ぶとすれば、躊躇なく次の一首を抜きます。

父母の涙ぬぐひしハンケチを
顔にあてやり棺にをさむ　（『銀』大正3年）

使い古したハンカチーフ。何とはかない死出の旅の餞でしょうか。しかし、これが親として最後の最後にしてやれることだった。そんなはかない行為がかえって胸を打ちます。

万象ノオト

テーマ『旅』

母を訪う旅

那覇　辺野喜宝来

母は台北で生活している。2023年5月、コロナが「5類感染症」に移行されると、いち早く台北へ飛んで、母に会った。今、母が住んでいる家は、私が7歳から高校入学するまでの10年間暮らした「大稲埕（だいとうてい）」から徒歩で約30分。2019年2月に父が他界するまでは、二人で住んでいたが、今は独り暮し。

大稲埕は、台北で最も早く開けた市街地で、目抜き通りといえば、廸化街（てきかがい）である。母は私が帰省するたびに、廸化街を散策したいといい、杖をついて二度ほど行った。昔ながらの街並は母の心を穏やかに満たしてくれ、私を幼い時の記憶へと誘ってくれた。滞在する4、5日間に母と一緒に食事できること、話せること、歩けることが私の宝物である。

私の旅

燕　渡辺志ま

夫の赴任地新宮市で一年余暮らしたのは、子供が生後5か月の長男だけだった70年前のことだ。私には長めの旅として思い出深く懐かしい所となった。

新宮市は熊野川の河口の木材の集散地であり、作家の佐藤春夫の生誕地。那智勝浦と共に旧跡史跡の多い風光明媚な所だ。那智の滝はその一つ滝を虚子が詠み、その句碑に謁えたのは数十年後になる。一行句だったと思う。

神にませばまこと美はし那智の滝

帰りにもう一度拝読した。

60歳代になって国外、国内また「万象」の大会と、機会を逃さず歩き廻った。今は家が一番。先日一泊二日の介護施設体験。これも旅のつもり。あとは旅立つという大旅行が残っている。

小さな旅

東京　北口富栄

子供の頃、旅といえば母の実家や親戚へ年に数回行ったことでした。特に金沢へ行くのが好きで、チンチン電車に乗って街を眺めるのが好きな子でした。

今では、国内外の楽しい旅の思い出が沢山ありますが、近頃思い出すのは、十数年前からの月一回の句友との東京近郊でのミニ吟行です。ベンチや四阿で青空句会をし、里や町そして都心へと、大人の遠足気分でした。

友人が蔦におにぎりを持って行かれ、皆で「きゃあー」と叫んだ楽しかった思い出もあります。

まだまだ行きたい所は沢山あったのにコロナ禍で叶わなくなり、残念です。近頃は足腰が少し衰え、以前ほど歩けないので、色々な所に行っておいてよかったと感謝しています。

南国の旅

東京　橋本紀代子

子育てから解放され、気がついたら

ダイビングが私の趣味の一つになっていました。

海の傍で育ったにもかかわらず、何故か泳ぎが苦手でした。たった一度の体験で、すっかり海の虜になり、国内から海外へと領域が広がりました。

基本的には南国でしたが、忘れられないのはあの赤道直下の島でした。俗に言う「真珠の首飾り」と言われている島です。手つかずの一面の椰子の林とパウダーサンドの砂浜、地平線に沈む夕。今思えば夢のような時の流れでした。

赤道近くの島々ではどの島でも、地元の美味しい南国のフルーツのおもてなしに、夏のバカンスを満喫させてもらい、私の人生を充実させたものと考えております。

立石寺

静岡　長谷川洋子

夫の転勤に従い、仙台市に10年間住んでいた。この機会に芭蕉の『奥の細道』の旅を体験しようと松島・平泉を散策し、最上川下りをした。山寺は特に印象に残っている。

当時中学校に勤務していて、山寺の立石寺へのバス遠足を行っていた。生徒たちには山頂までの途中で見たものを俳句にするというミッションがあり、気に入ったポイントを探しては句にしている姿が真剣で、自分も引き込まれた。

時期は5月。蝉は鳴いておらず、若葉の美しさや岩の斜面、寺社の様子、山頂から見えた風景を詠んでいたことを思い出す。

立石寺という山頂にある寺の魅力や、静寂な中の新緑の美しさを、芭蕉を通して実感出来た。その地で俳句を作ったことが今につながっている。

車椅子の旅

金沢　宮崎惠美

花の蕾の膨らむ頃、私の胸にも膨らむ思い出があります。主人は旅好きで、京都の「哲学の道」が大好きで、思い立つとすぐに出かける人でした。15年前、東京高輪での大切な会合に出席するため、入院中にもかかわらず、退院を早めて車椅子で臨んだのです。

金沢駅改札口では駅長さんが、乗り口用スロープを用意して下さり「はくたか」に乗車、越後湯沢駅でも駅員さんが「たにがわ」に乗せて下さり、終点ではケアタクシーの方と、リレー方式で無事出席が叶いました。

麻布の善福寺では親友の墓参をし、浅草寺の「菊供養」も、そして翌日の会合も無事終了。三日目にはホテルから無事帰宅。

念願の叶った主人と私は笑顔で素敵な旅だったと語り合いました。年齢と共に他人様のご親切を「お蔭様」と有難く思う日々です。

「万象ノオト」投稿募集

▽9月号「　坂　」（5月末日締切）
▽10月号「エアコン」（6月末日締切）
▽長　さ　本文　17字×19行以内
▽投稿先
〒417-0861　富士市広見東本町14－14
神田美穂子

万象作品

江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

新しき朱の箸で溶く寒卵　那珂川　髙山ひさ子

室外機の陰より翔てり寒雀

○春宵のＡＩに訊くイタリア語

選挙カー避けて裏道梅真白　宜野湾　宜野　顕

○海風へ甘蔗穂の光刈り落とす

朝がすみ磯を離るる手漕ぎ舟

木の芽風幼ふたりの砂遊び

強東風や女御願の包み解く

一組の蒲団を干して客迎ふ　福岡　園田清子

卒園の発表会は桃太郎

○毛糸編む葉つぱの色と空の色

ある物で済ます一日大寒波

和菓子屋の湯気のゆたかに冬うらら　酒々井　小林あけみ

初雪や路地に残れる御神木

撓ひては雪跳ね上ぐる小枝かな

○冬川の底に気泡のリズムあり

冬ぬくし父母の遺愛の蓄音機　柏　村田由美子

冴ゆる夜の夫の大きな鼾かな

○雪催夜は長湯となりにけり

人住まぬ家の古びゐて初音かな

○ぱりぱりのむすびの海苔や女正月　静岡　伊東文恵

寒鴉ビルの谷間を塒とす

枯芝へ寝そべる童地蔵かな

春待つやぷるんと止まる洗濯機

老酒の白き大甕年新た　三鷹　植村康子

○玄海の風に鈴鳴る破魔矢かな

亡き父の座にも湯気立つ雑煮椀

緞通の藍の牡丹や奥座敷

雪積んで小さきトラック急ぎたる　札幌　石田　睦

日脚伸ぶ足元軽き帰り道

雪しまき黒き人影突然に

読みかけの本積み上げて冬ごもり　島崎　洋

鬼やらひ心の内の鬼を打つ

六花崩れぬままを手のひらに

雪明り考の面影透かし見る　杉山和廣

天空の闇を制して月冴ゆる

子供等か軒天氷柱からからと

足もとに来て離れざる痩せ狐　杉山鈴子

吾を背負ひ考行く道や雪しまき

廃屋の崩れて雪のふりしきる

迷宮の通りか雪を積みあげて　札幌　竹重富子

四方から雪の迷路を園児来る

物音と静けさ雪にこもりけり

夕まぐれ雪に入り日の紅のこる　田邊政代

○除雪して九十歳の力瘤

老木の芽吹く兆しや風潤む

スタンドに並ぶ車の雪煙　土門一平

熱々の豚汁うまし雪まつり

春光や窓際の猫喜べる

帰るさの角打ち一杯隙間風　土門　一

湯豆腐やしばし眼鏡のくもりたる

春寒し弦の切れたる古ギター

一片の雲の流れや春隣　八代洋子

抱き枕しつかり抱ける吹雪の夜

初雪や見る間もなくて消え失する

母作る葛湯懐かし匙の音　新庄　曾野部礼子

具沢山六腑に染みるなつとう汁

小刻みに馬の背歩く雪掻き分け

母の背を越したる孫へお年玉　大江　安藤桂花

○まつさきにシフト書き込む初暦

雪晴や水満々と最上川

山宿の太きうつばり団子花　仙台　富田洋子

風花にのりて祝詞やおついたち　※おついたち……毎月一日に神社へ参拝する「お朔日参り」

寒明くる紐締めなほし一万歩　新潟　齋藤　信

冬霧や鼻腔の奥の煙草の香

ライターの奏づる音や冴返る

立春やギンガムチェックのワンピース

春を待つ廊下の隅の車椅子　榊原キヨ子

雪しまき揺れをさまらぬ舫ひ船

空き部屋のうすき埃や寒の明け

○表札をほのかに染むる初茜　佐藤幸示

氏神の注連は質素や縄一本

鮮明な佐渡の山襞初景色

インクの香残る朝刊初御空　本間悦子

引きよする老犬の四肢悴めり

寒の明け厨明るくなりにけり

震災禍つむぐ若者木の芽晴　山田季聴

寒紅梅古木の幹をくねらせて

街宣車止むる大雪投票日

かしこまる陶の福助春隣　燕　渡辺志ま

春立つや決めたる杖の置き所

○夕東風やコロッケ売れて店じまひ

いたづらの猫を宥めて毛糸編む　芳賀　福武幸子

護摩の火に高鳴る太鼓鬼やらひ

寒明の空を纏へる鳶の輪

福寿草踏まれぬやうに囲ひけり　鹿沼　渡辺利子

葉の裏の紅くつきりと冬椿

むくどりの卵空色寒冴ゆる

先頭へ尻を振り振り続く鴨　栃木　飯塚キミ

○通り風ひとかたまりの白鳥へ

雪解の水は水玉樋の口

雪空にひときは光る七つ星　佐野　仲山さよ子

いちどきに鴨の溢るる水面かな

新年会師のシャンソンのアンコール　義本美智江

冬夕焼からたちの棘錯綜す

蠟梅や停車場に待つリュックの子

寄せ植ゑの鉢に春雪てんこ盛り

踏むたびに悲鳴ぎしぎし霜柱　志木　汐見克彦

蠟梅の風ふうはりとわたり来る

ひと枝に紅白添ふる梅二輪

○手を合はす黄泉比良坂冴返る　志木　森山洋之助
菜園の土のやはらぎ春兆す
春浅し朝の洗顔息を止め
初雪や孫たち揃つて笑顔見せ　新座　多田英治
雪掻のスコップの音しきりなり
老妻に「雪掻するな」と声かくる
ヒヤシンスの甘き香りにほつこりと　所沢　小橋川和子
猫柳なでて静かな水辺かな
北国の春待つ木々に日の光
待春や末吉のくじ結びたる　千葉　高田みや子
山裾に野焼の煙二三本
○開拓碑裏にほつほつ犬ふぐり
藪鶯ジャングルジムに遊ぶごと　成田　宮本うらら
特設のバレンタインの日の熱気
小さき芽は時をたがはぬクロッカス
夜の更けて水仙の香の深まれり　佐倉　新谷八郎
涅槃西風雲次々と塔の空
噴水の鶴の羽より氷柱垂れ
肉饅のふつくらまろき春隣　有泉正夫
春近し波しづかなる九十九里

酒蔵の麹ぶつぶつ山笑ふ
鏡びらき七個出できしパック餅　佐倉　杉田富美代
初富士の白き頂遠く見る
掃かれたる参道新た初詣
凩と闇に消えゆく終電車　鈴木隆久
天地の闇透かしゆく初明り
鬚剃つて我正月の顔となる
静かなる闇の中より寒波来ぬ　鈴木美根子
やはらかな筆のながれや春兆す
日脚伸ぶ幼子あるく踊るやう
風鈴のすずやかな音や昼下り　船橋　近藤澄子
秋彼岸夫の墓に詣でけり
夕暮をとんで行きたり赤とんぼ
深霜の家の形にくづれたる　山口秀吉
霜柱踏んで戻りぬ昭和の子
携帯のメール減らすも年用意
管理人旧居に春の風通す　柏　鹿毛満子
梅林のゆるくまがるや杭の道
○悴みてボタンの穴に針迷ふ
落椿しきりに突く鴉かな　松戸　石川幸子

春の雪朝刊届く朝まだき　　高野翠子（東京）

如月や白スニーカー新調し　　鶴田智美

朝の日に黒き城趾や寒土用　　中澤桃子

バリトンの読経洩れくる冬青空　　橋本紀代子

冬日燦かねのなる木の濃き紅　　長谷川信也

雨に濡れ紅深めたる寒椿　　長谷川はるみ

寄り道の社に白き梅一輪　　平子甲奈

立春の光きらめく梢かな　　寿多映子（松戸）

折れし針一本もなき針供養　　渡部洋子

○マフラーをぐるぐる巻きに投票所　　安藤美酒々（東京）

銀世界の衆院選挙着ぶくれて　　大場八朗

肩の傷痛みのつづく寒の夜　　北口富栄

退院の街は師走の色となり　　齊藤孝夫

病院は別世界なり年の暮

冬薔薇色なき庭に紅一輪

どんど焼高くあがるは誰の書ぞ

月冴ゆる一戸一戸の灯の明し

ギターの音小枝弾くる暖炉の音

凍星やポプラ並木のきらきらと

松ぼっくり暖炉に足されバオと割れ

ほんのりとモカの酸味や寒に入る

霜柱かすかな音に崩れゆく

蠟梅や誰の為でもなき香り

○内子座の奈落ひんやり息白く

雪下ろす老父の姿きびきびと

真青なる空ひとりじめ雪の富士

柳の芽風しなやかに捌きをり

春めくや軽きリュックの街歩き

野遊の弁当の菜やり取りす

流氷の便りに無事を喜べり

蠟梅の池に香りを落としけり

鷺一羽戸惑ひ降るる池普請

今時の犬も諾ふ防寒着

孫共を預かる一日暮易し

○霜柱蹴散らす軍靴杏として

○枯芝に投げ出す足の先は海

初場所や高き櫓の触れ太鼓

羽毛舞ふダウンコートの小さき穴

両手上げ眠る赤子や小春空

猫飲める水音高く春立てり

誰がための解散ならん雪しまく　東京　前川　昇

大根の突き出る白さレジ袋

帰るさのベンチに一人冬日和

花びらに積もれる雪を払ひけり

朝ぼらけ蕭条とある冬木立　宮﨑正義

朝まだき静かに入りぬ寒の月

ほのぼのと灯る蠟燭聖誕祭

冬ざれのくちびる祇めて和歌問はれ　調布　荒井　仁

○ささくれて荒磯を抱く寒の槙

老ダイバー浜に浴びたる寒の潮

夕暮れて話は尽きず小正月　三鷹　南場雅子

春霞富士を隠せる街の上

ランチしておしゃべりをして春の街

富士雪解その一雫多摩源流　府中　竹村晃子

母編みしセーターの袖ほつれぎみ

冬空の青極みたる奥多摩路

出羽富士を越ゆる白鳥夕焼色　日野　松原悦子

道違へ二尺の雪を一歩づつ

百二歳の屠蘇の大盃廻りをり

大黒の背籠を溢れ山椒の芽　松原悦子

春立つや動き始むるお腹の子

表札に家族の手形長閑なり

喧騒と第九の混ざる年の暮　青梅　横井一美

まづまづの天気と心お元日

あつけなく過ぎてしまひし三が日

茎太き皇帝ダリア冬来る　横浜　大駒泰子

煌々とコンビニ浮かぶ冬銀河

車窓より冬の陽射しを眩しめり

ゆきずりの人の会釈や初詣　大駒泰子

四日はや埠頭のきりん首もたぐ

公園のりす駆け巡る四日かな

※きりん……「赤いきりん」というクレーン

淡雪に瀬戸焼の亀すつぽりと　岡　元枝

巽るるや赤き小屋根の道祖神

春耕や背に日差しのやはらかく

寒満月首を縮めて下校の子　加藤和子

背に白き星ある猫に雪降れり

薄日洩れ止まぬ雪空鴉飛ぶ

梅未だ逝かれし人の席空きて　坂本具子

押し合うて眠る小鴨や神の池

雪の花咲きし朝や鵜の声

秋雨やパークトレイン汽笛吐く　横浜　柴田雅春

飯台の豊漁めづる初さんま　長野　高朋

生垣の間に深紅の曼珠沙華

人影の一人も見えず冬田道

無職の身日々の暮しのちやんちやんこ　豊　美佐子

煤逃のここにも一人古本屋

受験子にはづむ年玉祖父母より

横浜に初雪の報空仰ぐ

賀状終ひ検討したる傘寿かな　豊　美佐子

初場所や小兵力士の宙を跳ぶ

一年ぶり家族の揃ふ二日かな

幼子の赤き落葉を束ねけり

天窓に春日さす蔵酢のにほひ　茅ヶ崎　久保田富士子

大鍋に味噌豆を煮て小半日

○一合のこげ芳ばしき菜飯かな

ざくりざくり光の遊ぶ霜柱　伊勢原　山本カツ子

犬ふぐり雨待つ畝を包みたる

早春のウォーキングや富士を背に

病む夫の疾く疾く治れ鬼は外　松田　古谷悠紀子

鬼やらひ杣の家々闇ゆるむ

墳丘の雨に打たるる忘花　静岡　飯田優子

クレーンの頭出づる埠頭冬の霧

蒲団干す湊の潮の香り受け　石川直樹

凍菊を空き瓶に挿し六地蔵

春祭飛び跳ぬる子の父親似

溶け合うて最後は黒に春の闇

雪模様八峰尖る八ヶ岳　海野俊彦

初詣身振り手振りの警備員

轟音や川掘るユンボ初仕事

着ぶくれて都会の夜に迷ひたり

冬木の芽壮士の墓に影落とす　奥川裕美

幾重なる鳥居くぐりて春隣

夕刊のポストの音や日脚伸ぶ

水底に鰭縮めたり寒の鯉　杉田義則

○霜柱踏むやゴジラとなる傘寿

高き枝に大吉結ぶ初神籤

稲荷社の鈴緒揺れをり寒四郎　杉山巳代

隼の風切る羽の尖りをり

富士の裾どおと流るる雪解川　高井明子

太々と寺の門鐘冴ゆる　静岡　田中秀幸
洞割るる白梅香り放ちたり
初東風や絵馬の触れ合ふ音幽か
○境内の寒気を揺らす太鼓の音　筑地裕子
バスを待つ床几の嫗冬茜
木の盆に収まり悪き鏡餅
冬至柚子籠いつぱいに届きたり　内藤允昭
切干の風吹く度にちぢみをり
煙管の灰吹き落とす長火鉢
飾売濁声を上げ呼び込めり　中澤祐一
裏白の反り返りたる神の棚
香花に千両一枝足しにけり
成人の日の眉きりり写真館　永田公香
手袋を脇に挟んで手水かな
切炬燵へもういいかいとかくれんぼ　野﨑浩子
寒梅へ童地蔵の手を合はせ
蒼天へ怪獣めけり樹氷群
竹筆の文字春光に飛び跳ぬる
甲高き鳴き声寒のとんび二羽
畑鋤きの人の疎らや富士裾野

稲荷社に梅檀の枯れ枝広げ　静岡　長谷川洋子
待春や清水港のおにぎり屋
裸木の影揺れてをり壮士墓
皺の指や釦付け終ふる　福島章友
小さき手の放てる独楽のゆらり立つ
米研ぎの薬指より寒に入る
白龍のやうに雲ゆく寒の朝　焼津　小梁洋子
○浪曲の耳なし芳一冬深し
鳴き合うてからみ合ふ鳥春近し
寒風に向かふ一歩や前屈み　掛川　鈴木美由紀
雨しとど大樹の下の飾売
○鳰とぷんとぷんと潜りをり
獅子頭泣き叫ぶ稚児追ひ掛くる　川根本町　鈴木裕一
凧揚げの糸引く指に力込め
松過の酒屋の棚の入れ替はる
冬の虹けふ一日の始まりぬ　金沢　上野冨貴子
年用意メモに書き足す点袋
ちと大き柑子飾りて今朝の門
朝早く寒紅梅にまみえたり　北野陽子
冬霞近くて遠き母の家

朝刊の届く足跡雪の中
屋根雪のずしんずしんと落つる音　金沢　新出祐子
大寒の窓を鳥声掠めたる
午年はをるかと問はれ節料理　菅原雅子
○咳一つ赤子の拳全開に
とろ箱の屋号かき消し雪しまく
着ぶくれて待合室の無言かな
寒の凪砂丘に続く蹄あと　田上ナツ子
○繰返し波を転がし紙を漉く
玉石に混じりとび出す竜の玉
蠟梅の莟ふくらむ垣根越し　廣田宏美
小路ぬくる風に干柿甘みまし
ばば様が手提げより出すお年玉
荒波のまにま海苔掻く媼かな　宮崎惠美
晴れし日や彼方(おち)の紅梅よくみゆる
八橋や蒲鉾型に雪積もる
晴れ渡る空へ雪吊立ち上がる　能任康子(かほく)
年の内あれやこれやの用済まし
冬衣膨れてゐたりクローゼット
雪の花舞ふ空見上げランドセル　白山　朝倉みゆき

そぞろ行く友禅染の春ショール
立春の並木の雀賑やかに
塀に沿ひ蠟梅の香の流れたり　白山　鶴尾正江
川の音凍蝶しばし舞ひ上がる
風花の吹かれ来るを仰ぎたり
悲喜共に生くる二人の七日粥　敦賀　川口和代
雪国に慣れ雪掻に慣れにけり
還らざる日の手紙手におでん酒
○畳針ずしりと二本針供養　奈良　町田すみれ
母の手に馴染んでをりし納め針
雲しまく川面ネオンに染まりけり
落椿日向ぼろりと動かして　三好　内田孝子
出合ひとは楽しきことよ探梅行
ほつほつと囁きながら梅の花
鈍色の空や朝餉の寒蜆　細田良子
凍星や午前零時のロープウェイ
白壁のうだつの町や梅三分
祝ふこと出来る幸せ冬の宴　徳島　林　早苗
寒雀風をふくみて風に飛ぶ
朽船の舳先に震へ冬鷗

賑やかに一時退院去年今年　徳島　山本晴美
蕎麦すする母の命日大晦日
憂きことも忘るるやうな初戎　山本瑤子
小雪舞ふ都大路にたすき継ぐ
正月の城山に聞く鳶の笛
寒雀一羽遅れて飛び立てり　小松島　田上幸子
大寒や焔の小さき絵らふそく
蜜柑採り終へて鎮もる故郷かな
○雪女の影やセンサーライト点く
日々の事仏へ語る去年今年　福岡　鶴田輝代
己が心映してみたし初鏡
初礼に野菜あれこれ賜りし
ケース越しのケーキ耀ふクリスマス　太宰府　美山留唯
鼻濁音の歌軽らかや石蕗の花
かぎ編みの得意な友の冬帽子
春疾風もてあそばるる鳶一羽　門川　請関ゆかり
鬼は外唱へて向かふ手術室
霜焼のかゆさむくむく昼下り
正座して炎見つむる寒夜かな　国富　山口孝治
○築山の子ら踏む斜面霜柱
初空へ紙飛行機と子らの夢
わだかまり解けて大根ぶつ切りに　那覇　稲嶺有晃
○ひとり居の厨の火種冬の雨
潮騒を吸うて紅濃き島桜
初春の風のゆるびや守礼門　大城末治
海を来て日照雨は石蕗の黄を打てり
ふる里の桜便りや鬼餅（ムーチーピーサ）寒
石道の石の尖りや冬すみれ　髙嶺容道
立春や川面ひと葉の浮き沈み
幼子の春の一歩やささら波
おみくじは小吉とあり初詣　ベルリン　森尾　舞
初売の衝動買ひや夜の吐息
元旦の豆腐屋日の出と共に開く

〈お詫びと訂正〉

4月号49ページ、渡辺志ま様の句に誤りがありました。お詫びして訂正します

誤　冬うらら鳩菓子なべて小さな日
正　冬うらら鳩菓子なべて小さな目

万象作品の佳句

江見悦子

春宵のＡＩに訊くイタリア語　那珂川　髙山ひさ子

私たちの日常生活にＡＩがすっかり馴染んでいる時代、筆者も手軽にスマホを使って知識を手に入れている。掲句ではイタリア語をＡＩに訊ねているのだ。ミラノ冬季オリンピックに関わることなのかもしれない。季語は「春宵」、幻想的で華やかな情緒たっぷりの言葉だ。春宵に誘われ、ふっとイタリアの地、イタリア語に思いが及んだ。軽やかで明るく、新しみに溢れた楽しい句になった。

海風へ甘蔗穂の光刈り落とす　宮野湾　宜野　顕

沖縄では「甘蔗刈」が冬の季語。『沖縄俳句歳時記』によると1月下旬から5月下旬まで作業が続き、「花穂の梢頭を切り取り、芒のような葉を落し、地上すれすれのところから茎を切り取る。刈るというより倒すのである」とある。沖縄の冬の強い海風の中、大揺れの甘蔗の穂には日の光が差しているのだろう。「光刈り落とす」が鮮やか、沖縄の地の原風景を写生している。

毛糸編む葉つぱの色と空の色　福岡　園田清子

作者は、巻頭の髙山さんと一緒に芙蓉会句会に属している。少人数の句会だが、小林愛子先生のご指導の下よくまとまって仲が良い。この句、「毛糸編む」が冬の季語。マフラーか、セーターか、いずれにしても毛糸で遊べる贅沢な時間を作者は味わっている。「葉っぱの色と空の色」の鮮やかな緑、青、いや赤も黄色もあるかもしれない。絵本のような世界に遊び、童心に返っている時間が心地良い。

冬川の底に気泡のリズムあり　酒々井　小林あけみ

飯田龍太の句に〈一月の川一月の谷の中〉がある。季語「冬川」にこの句を思い出した。故郷の冬の静謐な自然を詠んだ龍太の句には孤独感を感じる。

掲句は川底から川面に湧いてくる泡を「リズムあり」と感覚的に捉えている。「気泡のリズム」に春の兆しを感じた瑞々しさが新鮮で魅力的だ。

雪催夜は長湯となりにけり　柏　村田由美子

夕方になってから急に冷え込んで来た。夕食を終え、一日の家事を終えてゆっくりと風呂に入る。これから雪になるのか、様々なことを思うともなく思っている作者、雪は人を詩人にする。「なりにけり」と、切れ字の「けり」を使ったすっきりとした句になった。

ぱりぱりのむすびの海苔や女正月　静岡　伊藤文恵

「ぱりぱり」の擬音語がこの句の眼目。手料理を持ち寄った女性たちが遠慮なく口にむすびを運んでいる姿は、実に自由でおおらか。いかにも女正月の光景である。

玄海の風に鈴鳴る破魔矢かな　三鷹　植村康子

「玄海」は「玄界灘」の略称。昔から大陸や朝鮮半島との海上交通の要路であった。冬は北西の季節風の影響で海が荒れることでも知られる。

初詣を済ませ破魔矢を持ったまま、玄界灘を見晴らす場所にやって来た作者。折からの強風の中、破魔矢の鈴が鳴りづめである。この地の有り様、歴史にも思いを馳せている句。「かな止め」に成功した。

まつさきにシフト書き込む初暦　大江　安藤桂花

「シフト」は交代勤務の勤務時間割のこと。年が明けて使い始める暦に、一番に仕事の勤務時間を書き入れたのだ。新しい一年をまた頑張ろう、と元気な作者である。現役の方の仕事の句は新鮮です。今後も是非仕事を句材にして下さい。

表札をほのかに染むる初茜　新潟　佐藤幸示

元日の明け方、東の空に差し始める曙光をいう「初茜」が新年の季語。茜とは茜草の根からとった染料で染めた色で、黄色がかった暗い赤色を表す。

初日の出を待っていると、日の光がまず表札をほのかに染め始めた。微妙な一瞬を切り取った、美しく目出度い情景。

通り風ひとかたまりの白鳥へ　栃木　飯塚キミ

「通り風」とは「ひとしきり吹く風、吹き過ぎる風」と「広辞苑」にある。知らない言葉に出合って嬉しかった。白鳥が群れて固まって動かずにいる上を、通り風が吹き過ぎた、という何ということもない情景だが、これも自然界の一部。平易でさわやかな句になった。

霜柱蹴散らす軍靴杳として　東京　長谷川信也

「蹴散らす軍靴」とは只事ではない。霜柱とあるので寒冷地での軍隊の行進なのか。「杳として」は、この後の文脈に「見つからない」というような否定を想定しているとみて良いと思う。国も地域も詠まれてはいないが、勢いよく前進を続けた兵士たちは今やどこに行ってしまったのか、人間の愚かさと空しさばかりが残る、と鑑賞したい。

鳰とぷんとぷんと潜りをり　掛川　鈴木美由紀

鳰が餌を探して潜る様子を「とぷんとぷん」と表現した。鳰の姿が可愛らしく、擬音表現の「とぷんとぷん」が絶妙。

繰り返し波を転がし紙を漉く　金沢　田上ナツ子

紙漉きの一工程を詠んだ句。「流し漉き」の場合、トロロアオイ、繊維、水を入れた漉き槽の中に簀桁を入れ、何度も水を揺り動かしてすくいとる、その場面である。「波を転がし」に感心した。眼前写生の力である。

畳針ずしりと二本針供養　奈良　町田すみれ

一年間針仕事で使って、折れた針を供養するのが針供養。淡島神社の神前には豆腐や蒟蒻が用意され、縫針や待針、ミシン針などが刺される。そこに畳針が混じっていた。どきりとさせられる景色だ。「ずしりと二本」に臨場感がある。

雪女の影やセンサーライト点く　小松島　田上幸子

庭に設置したセンサーライトが点き人影が通ったようだ。雪女の影かもしれない。雪女の句は難しいが、生活の中に普通にあるセンサーライトとの取合せが面白い。

築山の子ら踏む斜面霜柱　国富　山口孝治

築山の斜面を一斉に踏んでゆく子供たち、築山は一面の霜柱である。子供たちの足許に崩れ散乱する霜柱が朝の日を受けてきらきらと美しい。一瞬の驚きのある句。

新中央句会報（2月例会）

令和8年2月22日（日）東京文化会館
（出席16名）

江見　悦子　選

風邪声に裏切られたり内緒事　長谷川信也
児の舐る拇指の紅みや冬木の芽　長谷川信也
ランドセル母が担いで春の芝　松井宣夫
少年の太き糸引くいかのぼり　塗木翠雲
三椏の花やミュートのねむくなる　一由久美子
鳥憩ふ枝垂るる梅の傘の中　久留島規子
水底を流るる影や水温む　松浦陵保
一杓の水釣釜の鳴り静め　久留島規子
過去問の付箋の数や二月尽　大久保進
田起しや先づ田の神に酒と米　三屋英俊
あんまんの湯気ふところに春時雨　大久保進
㊥春を待つ何かうごめく羅漢堂　鹿毛満子
㊥春を待つ何かうごめく羅漢堂　鹿毛満子

掲句には「羅漢堂」とあるので、露天の五百羅漢とは異なり、お堂の中に収められた羅漢像だろう。「何かうごめく」に、羅漢たちが体を寄せ合ってひそひそと囁き合っているような場面を想像した。「何かうごめく」が作者の実感。「春を待つ」のは作者でもある。

風邪声に裏切られたり内緒事　長谷川信也

内緒の話をしたかったのだろう。声をひそめて話し始めたところ、返答の声が風邪声だったという。これでは内緒の話は無理、と思った場面を「裏切られたり」と表現した面白さ。

少年の太き糸引くいかのぼり　塗木翠雲

「いかのぼり」は、長いひれをつけた凧の形状が烏賊に似ているところから名付けられた。この句、「太き糸」が良い。少年にとっては少々荷の重い大きないかのぼりなのだろう。それを何とか上げようと格闘している姿が健気だ。「太き」としたところが俳句である。

三椏の花やミュートのねむくなる　一由久美子

ミュートとは、テレビ・パソコンなどの消音機能。音を消し、画面に目をやっているうちにいつしか眠気を催して来たという句。黄色の小さな花が球状に集まり芳香を放つのが三椏の花。ミュートと三椏の花との取合せが個性的で、新しみのある句となった。

中村　千久　選

このあたり下宿屋なりき草萌ゆる　砂地宏子
児の舐る拇指の紅みや冬木の芽　長谷川信也

露坐仏の淡き胎内冬ぬくし　長谷川信也
薩摩より来り二月のはじけ豆　砂地宏子
一杓の水釣釜の鳴り静め　久留島規子
娘来る鶯餅を手土産に　村田由美子
留守番の少女と犬と桜もち　吉中愛子
過去問の付箋の数や二月尽　大久保進
仏壇の母の若しや黄水仙　一由久美子
あんまんの湯気ふところに春時雨　大久保進
田起しや先づ田の神に酒と米　三屋英俊
㊥無骨なる若き父の手桃の花　砂地宏子

㊥無骨なる若き父の手桃の花　砂地宏子

この「若き父」、作者のアルバムにしまわれていた写真にあるものと勝手に解釈した。幼い頃の雛祭の思い出の一枚。作者を膝に抱いた父の手は、今思えば「無骨」に感じられたような。「桃の花」の取合せが、温かな父と娘の様子をイメージさせてくれた。

児の舐る拇指の紅みや冬木の芽　長谷川信也

赤ちゃんが「拇指」、つまり親指をしゃぶっている。無心にしゃぶるその指は真っ赤に染まっているのである。それを季語の「冬木の芽」に見立てて取り合はせた一句。もうすぐ春がやってくる。冬木の芽にも、この幼子にも。健やかな成長を祈っている作者。

過去問の付箋の数や二月尽　大久保進

受験シーズンともなると、車内で見かける高校生たちにとって、「過去問」を集めた問題集は手放せないもの。何度も繰り返し読んだあちらこちらのページには色別にした「付箋」が貼られているのだ。入試も終わろうかというこの季節、まさに「二月尽」。

吉中愛子選

ふきのたう萌黄に群るる楢林　江見悦子
このあたり下宿屋なりき草萌ゆる　砂地宏子
長閑けしや碗に薄茶の青き海　三屋英俊
露坐仏の淡き胎内冬ぬくし　長谷川信也
薩摩より来り二月のはじけ豆　砂地宏子
水底を流るる影や水温む　松浦陵保
一杓の水釣釜の鳴り静め　久留島規子
あんまんの湯気ふところに春時雨　大久保進
辛夷の芽先ほんのりと曲がるなり　松浦陵保
野つ原に探す補聴器山笑ふ　長谷川信也
無骨なる若き父の手桃の花　砂地宏子
㊥春の塵蘆花の書院の大机　江見悦子

㊥春の廛蘆花の書院の大机　江見悦子

作者が生活の大半を共にする相棒である机には、特別な関心があるのだろう。希望を満たす蘆花邸に見つけた正方形の「大机」。出会った瞬間にそこに置かれていた物も想像したのではないのかな。机にはモノを生み出す力と文化がある。

水底を流るる影や水温む　松浦陵保

記録的な今冬の寒さ、春を待つ思いは誰もだろう。何が流れていたのだろうか。「水底を流るる影」に春への思いが一気に昂る。

このあたり下宿屋なりき草萌ゆる　砂地宏子

「このあたり」と指定したこと、「下宿屋」という古い呼び名に懐かしさが重なる。跡地には草が青々と育っている。若かりし頃の思い出は甘く切ない。季語の「草萌ゆる」に作者の希望を見出す。

今後の新中央句会の予定

▽5月24日(日)　大妻女子大学　G棟411室　13時より

▽6月28日(日)　大妻女子大学　H棟313室　13時より

第26回「俳句四季」全国俳句大会予選通過作品発表

最近の名句集を探る

伊藤伊那男『狐福』
金山桜子『ひかりあふうを』
毬矢まりえ『妖精に注意』

座談会　司会・筑紫磐井　内村恭子　山田耕司　大西朋

*今月の章　谷口摩耶／福島たけし

*巻頭三句　山口昭男／村上喜代子　西川火尖／宮谷昌代　鈴木五鈴／花房八重子

*俳句と短歌の10作競詠　細村星一郎＋工藤吹

*LEGEND　長谷川かな女　水明・網野月を

*今月のハイライト　「松籟」「栴檀」「円座」「ひろそ火」

イラストレーター・伊野孝行氏の新連載

*好評連載
吉川千早　俳壇ランドスケープ
青木亮人　句の手触り、俳人の留き
大西朋　俳句へのまなざし
橋本喜夫　俳句のレトリック
藤村公洋　俳句のつまみ
神作研一　てのひらの江戸　―古典籍を旅する
堀田季何　諸家書架
石井隆司　たもとほる　俳句よもやま話
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki

2026年5月号　4月20日発売　定価1300円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

ルビーの小函 (5月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

4 **蠦ぐもり (よなぐもり)**
12 秀 (ほ)
碧 (みどり)
14 **鶩 (のすり)**
15 氷面鏡 (ひもかがみ)
遷す (うつす)
九十九折 (つづらおり)
勝守 (かちまもり)
二藍 (ふたらん)
春北風 (はるならい)
16 **長閑けし (のどけし)**
17 復習ふ (さらう)
冬旱 (ふゆひでり)
18 誘ふ (いざなう)
21 離るる (かるる)
22 **榛の花 (はんのはな)**
搦手門 (からめてもん)
23 鍔絵 (こてえ)
野梅 (やばい)
読み止し (よみさし)
24 **金縷梅 (まんさく)**
鋭声 (とごえ)
25 糸魚 (いとよ)
半纏木 (はんてんぼく)
寝ねがてに (いねがてに)
乳鋲 (ちびょう)
寄居虫 (やどかり)
26 水夫 (かこ)
塗師 (ぬし)
終日 (ひねもす)
寒鴉 (かんあ)
27 天地 (あめつち)
濁声 (だみごえ)
俘虜 (ふりょ)
屠腹 (とふく)
28 土塊 (つちくれ)
刮げて (こそげて)
29 瞠る (みはる)
白幣 (はくへい)
32 磔刑 (たっけい)
涅槃西風 (ねはんにし)
日照雨 (そばえ)
33 **桜楷 (さくらほだ)**
54 **甘藷穂 (きびほ)**
55 塒 (ねぐら)
老酒 (ラオチュウ)
緞通 (だんつう)
六花 (むつのはな)
56 宥めて (なだめて)
57 黄泉比良坂 (よもつひらさか)
58 諾ふ (うべなう)
杳として (ようとして)
59 蕭条と (しょうじょうと)
60 疾く (とく)
61 疎ら (まばら)
皸 (あかぎれ)
釦 (ボタン)
独楽 (こま)
鳰 (かいつぶり)
柑子 (こうじ)
62 鈍色 (にびいろ)
63 **春疾風 (はるはやて)**

消息等

江見悦子主宰の句

「くぢら」3月号に

欣一の白鳥の句に年惜しむ　悦子

「初蝶」3月号に

寝足らひし朝こぼるる松の露　悦子

「たかんな」3月号に

五十年古りし庖丁藷を切る　悦子

「伊吹嶺」3月号に

師の墓に枯れ高々と女郎花　悦子

第74回虚子・こもろ全国俳句大会

小諸市文化協会賞

平家琵琶無月の庭を濡らしけり　杉澤　修

俳人協会「今日の一句」三月七日・八日

鳥帰る水と空とのけじめ失せ　沢木欣一

広い湖を想像する。「鳥帰る」は、鶴、鴨などが、北方の繁殖地へ帰る春である。天と地のけじめがつかない程、茫洋とした中を点々と鳥たちが日本を去ってゆく。果てしなく広がる大空と小さな鳥たちの存在感。生きんがための生命力がいとおしい。

（内藤英子）

雛流す赤き袂の阿田わらべ　小林愛子

奈良の吉野川での雛流しである。近頃は阿田も子供の数が少なくなったそうで、吉野川まで雛を抱えた童女の列も淋しいものであった。　自註現代俳句シリーズ12（22）

たけふ菊人形総合俳句大会

兼題　佳作

涼新た薄墨はしる一茶の書　霍田勝子

令和7年度 秋季福井県総合俳句大会

席題　山口美智女 特選

幕末の啓発録や小夜時雨　中川雅月

第64回 全国俳句大会予選通過作品

産小屋の残る海女径いぬふぐり　霍田勝子

令和7年度「奥の細道」

つるが芭蕉紀行全国大会

安西　篤　特選

放棄田の腰掛石や盆の月　中村　優

坊城　俊樹　入選

秋の声写経の筆の先までも　倉谷ますみ

古賀　雪江　入選

月代や水音高く鯉はねる　為永香月枝

待宵や病床の窓わずか開け　倉谷ますみ

静岡「季節風」新年俳句大会

1月18日静岡「季節風」新年俳句大会が27名の参加で大里生涯学習センターで行われた。

特選句

煤掃きや納屋に積み置くブリタニカ　石川裕子

臭の一声闇の深まりぬ　大村峰子

逞しき樟の骨格初明り　荻野加壽子

白菜の尻を並べて売られけり　藤原千代子

神の留守沼の主が泡ひとつ　神田美穂子

高点句（四点以上）

針山に潜む針先開戦日　荻野加壽子

逞しき樟の骨格初明り　荻野加壽子

吊り橋を行こか戻ろか雪女　大村峰子

臭の一声闇の深まりぬ　大村峰子

泥の手に泥をしごけり蓮掘り女　大長文昭

崩れゆく渡船の水脈や初茜　宮﨑智恵美

片付かぬ書斎もよしと去年今年　望月敏男

煤掃きや納屋に積み置くブリタニカ　石川裕子

神の留守沼の主が泡ひとつ　神田美穂子

第19回「万象」千葉県支部俳句大会ご案内

日　時　5月9日（土）12時 受付開始

13時 投句締切

吟行地　船橋市内【船橋大神宮・船橋港他】

会　場　船橋市勤労市民センター3階

第3会議室

アクセス　JR船橋駅南口 または 京成船橋駅東口より会場まで徒歩5分位

参加費　千円　投句数　4句

大会幹事　久保村淑子・喜多恭仁子

（報・編集部）

（⬅この線より切り取ってください）

万象作品

令和八年

九月号

（六月十五日締切）

	都または市・町・村名
姓　号	ふりがな
	年齢

（句の表記は歴史的かなづかいで）（＊の枠内には何も書かないでください）

＊

＊

＊

＊

＊

0640808

札幌市中央区
南八条西15-1-5-904

万象作品投句係 行

110円切手を貼ってください

氏名	住所

〈通信欄〉

編集後記

▽3月25日、かつての「万象」同人で、編集業務にも参加していた山口素基さんの訃報がもたらされました。ひたすら俳句に打ち込んでいた素基さんの〈若竹の一本にして輝けり〉に魅せられて、私は俳句の世界に足を踏み入れたのでした。〈売りごゑに惚れて買ひたる屑金魚〉、葬儀の庭で目にした一句。ただただ感謝のみ。（千久）

▽先日友人が「今夜はこの電子レンジ圧力鍋で料理するから楽ちん」と紹介された。メニューも豊富で、値段も最近は安くなったとか。料理は嫌いではないが、最近は時に億劫になる。「やめてラクに楽しく暮らす新習慣」と女性誌の特集にあった。（美穂子）

▽5月が好き。初夏の清々しさと連休があるから、と思っていた。だが最近、5月には憲法記念日があるからだと気づいた。学校で人権について学び、わくわくしたことも。「お前さんの世間は平ったくていい」という言葉に出会ったからだ。『木挽町の仇討ち』、この本お薦めです。映画では出会えなかった言葉。（宏子）

▽手にしているのは6～7センチほどのちびた鉛筆。そろそろ新しいのにとりかえねば。俳句の下書き、推敲はもとより、何を書くにも鉛筆を使う。ボールペンではどうもだめなのだ。字にならない。筆圧加減はなんといっても鉛筆。Bがちょうど塩梅がいい。芯はすぐに減ってしまう。で、手許においているのは「肥後の守」。（明子）

▽思いがけず編集のお手伝いをさせて戴くことになりました。久しぶりの校正作業に、心の準備が必要でした。高齢者でも編集に携わることは可能なのだと、ささやかでもお手本になれますよう努めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。（京子）

▽4月号から校正を担当することになりました。「ゆっくりと確実に」を心に頑張ります。これを書いているのは3月末。富山にもようやく桜が咲き始めました。（真紀子）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分　一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座　00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015　四街道市千代田1-7-10

塗木翠雲

万象

五月号

第二十五巻　第二号

通巻　第二九〇号

令和八年五月一日　発行

主宰　江見悦子

発行人　江見悦子

編集人　中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一-三一-六-603

万象発行所

☎〇三-六三二四-五七九六

印刷・株式会社ダイワクリエイト（☎ 03-3267-2125）

「万象」創刊二十五周年記念

第二十四回「万象俳句賞」作品募集

万象俳句賞は毎年一回広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上・発展に資するものです。多数の応募を期待いたします。

作品　**一人20句　未発表新作に限る**

原稿用紙など一枚に縦書きとし、一通（コピー可）提出
原稿の冒頭に題名を、末尾に住所・姓号を明記
封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと
メールでの応募の場合は、応募原稿と必要事項を添付してお送りください

選者　江見　悦子　小林　愛子　中村　千久　福島せいぎ　柳澤　宗正
中條　睦子　前田貴美子　榎本　文代　神田美穂子　沢辺たけし

応募資格　「万象」同人・会員に限る

締切　**令和8年6月末日到着分まで**を有効とする

宛先　〒二七〇―〇一一六　千葉県流山市中野久木五六三―一一一
穂苅　照子（万象俳句賞事務局）
〈メール〉6845ubwn@jcom.zaq.ne.jp　〈電話〉〇九〇―二四二七―五一七五

入賞発表　「万象」10月号　全国俳句大会で作品一席に万象俳句賞を贈る